

う。又斯やうな豊富な形式を避けて、景象自然の感情が流れ出てゐる箇所も無いではない。併しどちらかと言へば、此の點は此の風の技巧の短所とするところであらう。凡ての景象が、鋭く出ないで、琢磨せられて圓みを帯びて出て来る。上の卷、池の端あたりの巧緻なる記叙の如きは其の例であらう。秋の卷の第一章、主人公が監獄から出て来たあとの邊は、作中最もよく出来てゐて、覺えず人をほろりとさせる力があると思ふが、此筆は却て篇中最も美しい文字の少ない箇所である。殆ど技巧以上に落ちついた所がある。(扮本を云々するものもあるが、そんな事はどうでもよからう)夏の卷、北小路といふのが高等學校の寄宿舎内の出来事を述べ、るあたりも、右の一章には劣るが、兎に角似た行き方といつてよい。

次に主人公の性格の缺點を作者が意識して書いたといふこと、之れは善悪いかやうにも見られやう。善い方からいへば、之れがために性格が活きて来る。實際個相を具へたものになつて来る。主人公の性格が始終一貫して、何所となく平凡作者の視ひどころと違つた者の書いてある様に思はれる。此の點は作者に缺點弱所を意識して描くの用意があつたからである。併し之れと同時に、作者は果して

適當の度合まで斯かる洋風の刻畫法を用ひ得たか。若し徹頭徹尾缺點弱所の意識を離れぬ描寫であつたら、それは悲劇よりも滑稽劇の主人公を造るとき描寫法ではないか。『青春』の主人公に對しても此の疑ひが無いではない。彼れを一翻すれば滑稽劇の主人公ともなり得やう。それを思ひ切つて眞面目にした爲め、滑稽からは救ひ得たが、全篇を通じて深い同感といふ者を讀者から買ひ得ぬ結果となつた。讀むがまゝに、主人公をいやな男、卑劣な男、氣取つた男とは思はせるが、不びんな男とは思はせぬ。卷を閉づるに至つても、速男や北小路等がいふ如く、あゝかわいさうな男だとはどうも言ひ得ない。隨つて結末に沈痛の感味が乏しいこととなつた。是れ主として作者が残酷なまでに最後のページまで、主人公の弱點を抉るの刀を措かなかつたからであらう。或る意味で欽哉の弱點はなるほど時代の弱點で、而して作者が之れに痛快な一抉りを與へたといふ功はあらう。けれども、之れと同時に作者は時代の犠牲者を描くといふ意識を一層強く持つて欲しかつた。つまり時代の弱點を描くといふこと、時代の犠牲者を描くといふこと、此の二意識の配合がうまく取れなかつたのではないか。前者を描くに急にして

後者は之れを逸した。作者の考では、周囲の同感者などを以て此の方面をも描くつもりであつたらう。併しそれは十分の成功でなかつた。思ふに斯かる時勢の斯かる境遇にあるものは斯かる性格に墮せざるを得ざるかと、人をして主人公の性格から直ちに一層深く廣い運命に頭を回らさしむるの用意が足りなかつたのであらう。言ひかへれば斯かる大舞臺の主人公としては、性格に深さが足りなかつた。

終りに臨んで、當代の最も複雑な思想の階級を代表的に描かんとした作者の勞を多とする。(明治四十年四月)

『其面影』を評す

『其面影』を読むと觀察描寫の老練といふことが誰れの眼にも先づつく。用語文章の如きも、金臺にいぶしを掛けたやうな苦心が時としてはなほ覺えず、知らず金光を露呈する趣味である。三十九章の「家と名が付きや、植生の小屋ものあたりの

文調、乃至さよと哲也とが愈々戀に入る邊の對話の引締められて殆んど脚本の臺詞に近づきかけた趣など、其の例であらう。

此の作と他の青年諸家の短篇物とを想ひ比べると、彼れには人生の一邊が鋭角をなして見はれ、此れには廣い多角な鈍角な人生が見はれてゐる。彼れには冷徹の氣があり、此れにはおつとりと圓みを帯ひた氣持がある。彼れでは作家と作とが一杯々々で、知力過勞より來る所謂近代的憂愁の色が余地なく流れ出で、ゝゝあるが、此れでは一段高い所から近代生活を瞰下せんとしてゐる氣味である。従つて或は前者の眞面目な狭い、余裕の無い、一杯々々の、鉛の如く重い憂愁の調を擇ぶものもあるべく、或は後者のゆとりある、動もすれば嘲弄的にすらならんとする瞰下的な所を擇ぶ者もあるべく、兩者の趣味は必ずしも一致して居らぬ。たゞ其の主人公の性格及び其の煩悶に對する自意識の内容等に於いては、此の作と近時の青年作家の短篇物と脈を同じうする。之れを彼の同じ作者の舊作『浮雲』に比すれば、人物事件の形の上に多少の類似が求められると共に、其の内容に至つては正しく二十年の變遷をして、著しく知力的になつてゐる。『其面影』の主人公が煩悶の

自意識内に存する思想は『浮雲』の主人公の煩悶意識中には嘗て見出すを得ぬものである。

要するに此作の重なる特色の一は、廣く圓みある世態描寫の溫味と深く偏倚した性格解剖の冷味とを調和した所にあるのであらう。(明治四十年十二月)

講 話

英國の尙美主義

是れから述べますのは英國尙美主義の話であります。尙美主義はまた唯美主義、審美主義とも譯しまして、英語のイーツセチズム Aestheticism がそれです。即ち美といふ事を中心として一切の事を判断するものです。無論この言葉の中味は複雑であるが、それは話して行きますと解つて來やうと思ひます。兎に角美を尙ぶ、美を人生の中心と観るものと解して置いて差支は無、尙は英國の尙美主義といへば更に一層限られたものとなります。元來尙美主義は歐洲の他の國たへば佛蘭西などにもあつた。それを茲では特に英國と限る譯です。さて私が此話を思付いたのは一つは此主義が日本現時の社會の種々の状態と餘程通ずる點があるからである。例へば日本の文壇で新體詩に星菫主義といふものがあつた。

それから近時は社會全體に涉つて高襟ハイカラーと云ふものがある。是等に通じた一種の傾向が英國の尙美主義と餘程よく似てゐる。面白い對照であらうと思ひます。假に英吉利のイーッセチンズムを高襟主義と斯う譯したら此れに附帶して種々の對照類似がそこに出て来る。例へば當時英國で尙美主義と盛に戦つた反對派をフリステン (Phillistine) と呼んだ。是れがちやうど日本の道學先生といふ言葉に當る。又同じく尙美主義の人達が同じく盛に使つた言葉でヴァルガー、ハード (Vulgar herd) と云ふ言葉がある。此れは日本で云ふ俗人原または蠻カラ黨の意に相當する。此等の言葉が當時の論壇に盛に使はれて互に鎗を削つたものである。要するにイーッセチンズムは英國の高襟主義といふことが出来ませう。高襟主義は日本では今の事であるが、英國にては丁度今から二十年乃至三十年許り前、即ち丁度一千八百六十年頃始つて、七十年八十年と二十年許りの間が尙美主義全盛の時代に當つてゐます。面白い事には凡て文藝上、社會上の新しいムウヅメントの本場は佛蘭西と云ふのが常であるが、此尙美主義の運動の起つた前後には却て平生おとなしい英國に種々の新運動が起つた。何々イズム、阿々ムウヅメントと盛に新氣運

を起さうとしたものである。夫の宗教上のオックスフォード、ムウヅメントまたは繪畫上のラファエル前派など皆それで、ついで一方には尙美主義の運動が起つたのであります。先づ活氣のあつた時代で、これは前申す如く一千八百六十年頃から八十年頃迄の事柄であつた。

さて此主義が如何にして起つたかと云ふ話に戻りますと——斷つて置きますが、之は英吉利のウラルター、ハミルトンと云ふ人の書いた書物を土臺にし、他の書物を参考として調べたのです——此派の運動はノルドオの説によると夫の佛蘭西のポドレア、今から丁度四十年許り前に死んだ詩人が本であつたらしい。此詩人が死ぬと同時に恰も昔アレキサンダ大王の死後諸侯が其領土を争つて分け取つたやうに、此大詩人の崇拜者が四方から起つて惡い善いの見境なく其の特色を諸方から模倣した。此等の詩人以後尙美主義に及ぶまで乃至其後までを引く、めてノルドオはデカダン即ち時代末詩人若しくは頽廢期詩人と謂ふ。即ち文明と云ふものが時期を限つて進み行くうち先づ一期の文明が頂點に達すれば爛熟して腐つて潰えんとする。而して之に新文明が代らんとする場合には先づ其爛

熟した文明を破ると云ふ必要が出て来る。此種不安の時代は即ち頽廢期である、時代末である。

元來デカダンと云ふものは必ずしも佛蘭西に限らない、飛んで伊太利に往つては悪魔の歌を書いてデカダンの風に感染したと言はれるカルヅッチがある。獨逸は割に少いが英吉利に行つては殆んど此風潮の支店が出来た。それは即ち此の尙美主義である。斯様にイーツセチズムは佛のデカダンの別派とも見られるが一番初に之に感染した人は詩人のスキンバートンであるといふ。但し斯く尙美主義を佛の思想に本づかせるの當否は別として、實際スキンバートンが英吉利に於て此の運動の元祖であることは明かだ。そこでノルドオは例の猛烈な筆法を以て此等の人を罵つて、神經衰弱、墮落者、無暗に神經がつて、不思議がつて、高尚な事を云つて、無暗に道德に反抗する、罪惡を悦んで書く、肉の喜びや劣等の事を讚美する、惡魔主義、墮落主義であると口を極めて嘲つた。ノルドオは前の如く觀たのであるけれども、英國の尙美主義と云ふものが果して直接に佛蘭西から來たのであるかどうかは暫く別として、是れが一方英國の夫のラファエル前派運動といふものを

父として生れて來たものであることは明かである。即ちラファエル前派の續きが尙美主義である。系統は左様であるが、主義其者はと云へば大に變つてゐることも認めねばなりません。

元來此ラファエル前派運動といふものは御承知の如く當時の若い畫家彫刻家詩人等が六七人集つて、英國文藝界の現狀に満足せずして、就中繪畫の方を中心として一種の新運動を起したのである。歐洲繪畫の本元は人も知る如く伊太利であるけれども、彼の伊太利繪畫の黄金時代たるラファエル、ミケランゼロ等の出た頃から段々繪が完成すると共に種々の型や法則が出来て、後人はたゞそれを手本とする許り、次第に自然と遠ざかつて仕舞つた。我等は自然を手本にして、自然に立還らなければならぬ、所謂リターン、ツー、ネーチャ主義でなくてはならぬ。それには古伊太利のラファエル以前の畫家の態度が慕はしいといふ所からラファエル前派と名のつたのですが、是が丁度千八百五十年頃即ち尙美主義より十年餘り早く起つたのです。其時の人々は夫のロゼチの外ホルマン、ハントとかミレーとかいふ連中であつたが、其の主義は前いふ如く自然に還れといふ自然主義であると同時に、又

寫實主義も含まれて居り、濃厚な感情主義も含まれてゐた。中にも寫實主義自然主義と感情主義とは矛盾した性質を有つて居るもので、斯やうに不統一な主義であつた爲でもあらうが、此派は當時は餘り成功し無かつた。千八百五十二三年頃には早くもちりぢりばらばらの姿になつてしまひました。而して其の一人たるロゼチは自分独自の傾向を追うて専ら感情的方面に特色を發揮することゝなりました。無論種々の特色も他にあるが、濃厚な情緒といふことが彼の畫や詩の中心の特色であつた。斯くて或時彼は當時の學問の府である處のオックスフォードに招かれて繪を書きに行きました。すると平常から彼を崇拜して居る一二の學生がやつて來た。その人々はウイリヤム、モーリスと云ふ美術家、スキンパーンと云ふ若い詩人などで、是等の人々がロゼチの餘風を逐うて一つの團體を組織した。是が即ち尙美運動の端緒である。

人によつては種々な人をまで此の尙美運動の圈内に入れやうとしてゐる。例へばブラツニング、テニズン、亞米利加のホイットマン、獨乙のワグナーまでも引き入れる。斯うして見ると十九世紀後半の文學者は尙美主義に入ら無い者はないこと

になります。是れは餘り擴げ過ぎたものであるが、兎に角十九世紀後半を通じて當時の文藝家で多少此の風潮に染まぬものは無いといふ氣味であつたのでせう。そこで一體尙美派と云ふものはどう云ふ事を主張するのであるかといふに、先づ其の特色といふものを見ると、詩では概して言葉が綺麗で繪のやうで叙述が繪の様、すなはちピクチュレスクで、インテンヌ即ち感情の濃厚と云ふ事を生命としてゐる。濃厚な感情は一方には動もすれば事物を誇大にする結果、其の産物が虚飾的浮華的になるを免れぬが、詩にあつては調子が音樂的な綺麗なものにもなる。此尙美主義が始めて世に出た時は非常に世間から攻撃を受け、爾後引きつゝいて二十年間四面楚歌の聲といふ形勢で嘲弄攻撃の矢表に立つてゐた。併し是れは主義そのものゝ特色といふよりも他に理由があつたのでせう。さらば斯やうに英吉利のやうな大人しい國の論壇に訴訟沙汰となるほど騒しい論争を惹き起した理由は何であるかといふに、全體此の主義の人々はどんな連中であるかといふに先づ前に云つたウイリヤム、モーリス、此人は裝飾美術の専門家で、今日歐洲の壁紙の裝飾模様などは多くモーリス式であります。此の方面に革新を起こした

人で、又詩人でもあつた。次は同じく前に云つたスキンバイン。其の外ではオスカ、ワイルドといふのが最も注意すべき人で、此れは詩人であつて詩も散文も書いて居ります。併し此人の尙美主義に於ける立場はむしろ實行者といふ點であつた。そこで先づ此のオスカ、ワイルドの尙美主義に下した定義といふものを見るに、第一、藝術は藝術みづからを目的とする。随つて第二には藝術は人生、自然、思想などいふものに頼ることなし。悪藝術は此等を目的とする所に生ずる。總べて此等のものは一旦藝術の型に入れて始めて妙がある。第三に較もすれば人は藝術が人生を模すると云ふが倒様である、人生が却て藝術を模するものである。人間は本來模倣性を有してゐるから一番美しい形式を以て自分の感情を表すものである限り、人間が其の目的とか乃至其の他の感想とかを表はす場合には藝術を真似てこそ最も都合の好い譯である、といふに歸する。随分思ひ切つた當時一般の風尚に對する反抗主義であつたのです。同じく人生を描くにしても成るだけ現代を離れるがよい、現在自分の痛切に感ずることは非藝術的である、といふのです。斯様な主張を以て居ることが世間一般から極端な邪論として罵られる傾

を以てゐる外、オスカ、ワイルドは前にもいふ如く此の尙美主義の實行者であつた。此れが亦少なからず世間に對して戦を挑んだ事になる。例へば彼れは着物からして變へて、審美的衣服と名づけたものを着た。我々の美の感情を満足せしめるには普通に着るやうな無趣味な俗なものではいかぬと唱へて、昔に歸つて、中古風俗の色のけばけばしいものを着た。又向日葵や百合の花、此の二箇の花はど云ふものだから此の派の人に氣に入つたと見えて、外出の時は襟か胸に屹度百合の花か向日葵かを挿した、此等の花は此派の目じるしとなつた。又孔雀の羽根を卓子の上に置くとか、或は手に持つて行くとかして、之も此派の標象となりました。或は道學先生や俗人原を驚かして遣るといふので、ベルメルなど云ふロンドンの盛んな場所を此の風俗で練りあるいた。どう見ても狂氣か、さもなければ氣障な奴といふ風であつた。要するに奇矯を衒つた氣味であつたのが、少くとも反抗を受け一箇の理由であつたのであります。其外日本で云へば奈良朝式とか、平安朝式とかいふやうな好みで、家などをも裝飾する、今の家は殺風景で俗でいかぬといふ所から、中古形の裝飾などを施し、ちよつと器具に彫刻をするにも必ず楔形、菱

形といふ一種特殊の好みでなければ満足せず、窓には繪硝子の古雅な物を用ひ、古い陶磁器などを無暗に集めて、室内をさまざまにおれは趣味があるぞといふ風に飾る、之が却つて普通の人にはやりすぎ、いやみといふやうに感せられた。斯くて二十年程も冷嘲熱罵の中に過ぎて、千八百八十二年頃に及ぶと、世間も攻撃に憚れた氣味、又尙美派自身も世に揉まれて溫和になつた。

さて此の主義の世に與へた効果はどうかと云ふに、少くともスキンバインのやうな一代の大詩人も是から出るし、又モーリスの盡力は竟に英國のみならず歐洲の室内裝飾に變革を來たし、之を高上せしめた。是等は尙美主義の賜であります。此主義が攻撃せられる最中の状態は随分烈しいものであつたらしい。英吉利の文壇も百年前には今日の日本などと同じく随分人身攻撃もやつたものであるが、近年すつかり論壇の調子がおとなしくなつて紳士的になつてゐる。そのおとなしい文壇が尙美主義を中心として一時非常に猛烈な喧嘩をやつて大波瀾を起して來た。中にも夫のロバート・ビュカナンは先達て死んだ人であるが、此人が反對派を代表して、嘗に尙美運動のみならず、類似派と見られたラファエル前派までも盛

に攻撃したのです。其の結果遂に自分から裁判沙汰を起すに至つた。彼れビュカナンは先づスキンバインが詩集を出した千八百六十五年頃にスキンバインを猛烈に攻撃した。「詩人の會合」と云ふやうな詩を書いて、それでもつてスキンバインを嘲弄したのである。或俱樂部で文人が會をしますと、ゲーテもテニズンも來て居りました其席に、スキンバインも矢張り遣つて來た。二十三歳の壯者が髪を長くして蒼い顔をして遣つて來て、それで氣焔を吐いて狂氣の如く道徳はくだらないものである、眞理とか神とかいふものは一向信するに足らぬなど、廣言を吐く、一座皆驚いて白けて了ふ。座長の計らひで其壯者を外に出して了つたが、此の下鄙な壯者が即ちスキンバインであるといふ意味の人身攻撃でした。次にはラファエル前派のロゼチの攻撃をやつた。之は有名なもので、ハムレットの芝居の役割にあて、此等の人を嘲つたのです。またロゼチ、スキンバイン等の作風をビュカナシはフレッシュリー、スクール (Flashy school) 即肉體的感情許りを歌ふ派である、無暗に肉がかつた事を書くものであるから怪しからんと云ふ意味で専ら道徳的の見地から攻撃した。要するに當時の道學先生側のチャンピオンとして立つたのであ

ります。所が前のハムレットの役割其他にも動ともするとビュカナン自らが匿名でありながら自分をば立派な詩人のやうに評して、自分で自分の名を善い席に据ゑるなどの事をした爲に、文壇からはビュカナンも非常に批難せられた。斯やうにして辯難攻撃が新聞や雑誌の上で交換せられ、尙美派側ではスキンバーンなども悪戯をしてビュカナンを嘲弄し、遂にビュカナンから名譽回復の訴訟を起すに至つた。其の他一方では滑稽雑誌ボンチが一時盛に尙美派を嘲り、また此頃英國でやかましい「ミカド」オペラの作者が「ペーセンス」と云ふオペラを作つて同じく尙美派を題にし、同時に倫敦に二箇所の劇場で大當りを取つたなどいふ状態でした。

以上述べる如き事實が即ち尙美主義の話であります、今此の話を了るに臨んで、之に結論的批評を加へて見ますと、尙美主義といふものの中には、凡そ三點の注意すべき箇條がある。即ち第一はビュカナンの所謂肉感的といふこと、第二は藝術は藝術みづからの爲と稱して思想道德の凡てから獨立しやうとすること、第三は情緒の強いのを主とし自己といふものを餘りに明かに掲げ出さんとすること、是れであります。肉感的といふことはビュカナン等が考へるほど絶対に悪いことでは

ない。肉と靈とを餘りに分ち過ぎる舊來の理想説はたしかに事實を逸したものである。併し無暗に肉の聲を聞かせすぎて嫌惡心を刺戟するのも無論弊でありませう。ビュカナン等は専ら道德的見地のみから藝術を限らんとしたものが見られる。併し此相對した見方の矛盾は何時の時代にもあります。又第二の藝術は藝術の爲といふことには、通例二種の意味がある、即ち一は藝術を道德眞理等に對せしめて、之れから獨立するといふ意味と、一は藝術中の技巧を内容から獨立せしめて技巧即美と見る意味とであるが、併し此二様の解釋も根本には通じた點があつて結局美といふものは眞理や善徳やの助を藉りずとも、みづからとして目的があるといふに歸します。たゞ其美といふ場合に技巧のみを取るか、今少し廣い意味にするかといふだけの差です。此の主義を尙美派は一層極端に持つて行つて、人世最高の支配權は美にあると見んとした所が道德派の反抗を招いた所以でありませう。美は宇宙人生の最高現象、少なくとも其の一であることは疑もないが、それで實際生活を支配せんとするには弊がある。夫の美的生活といふが如きものは、文藝の範圍に始終すべきものを實際生活の上に濫用するより生ずる一種の

悲劇でありませう。次に第三の自己の發揚といふこと、是れにこそ重要な意味がある。蓋し當時動ともすれば科學的精神の勃興につれて客觀のために自己といふ主觀が埋没し盡されんとする、之に慊らずして埋没したる自己を掻き起こさうとしたのが即ち此の主張である。而して此の際自己を代表するには情緒の熱烈なる發動の外途がなかつた。所がそれもやはり例の極端に行つて、情緒の熱烈は誇張となり奇矯となり遂にオスカ、ワイルドの如き人を出して一舉一動みな自己の廣告と見られるやうな事をする、ノルドオの所謂自己狂自己狂となり了つたのであります。

此の自己主觀を先とする見解と、一方の客觀を主とする寫實的自然派の見解とは、是また由來容易に相合せざる一大矛盾であります。私の即今ひそかに考へてゐる所では、そこに一道の解釋がある、一言にて掩へば主觀の我はたゞ生命となつて一切の事象を客觀の指圖に任せ、そこに主客兩體の融合を見出だすといふ如き妙道を求めるのであります。是れは到底茲では述べつくせない、一つの纏まつた思想であるから他日を期するとして此の話を終ります。 (明治三十九年講義筆記)

歐文學中の日本

西洋の文學藝術の中に日本といふものゝ入つて居る、其の入り方に付ては、自から變遷があつて、詳しく調べて見たら面白い題目であるが、茲では大略記憶に残つて居る範圍で一端を述べて見る。

近代の歐羅巴の小説の中に日本を入れたものでは、比較的、古く且つ有名なものは彼の佛蘭西の小説家ビエル・ロチーの「マダム・クリサンテーム」即ち「おキクさん」といふ小説である。而してこれは一時非常に洸く讀まれた者で、今でも洸く讀まれる小説の一つである。其作者のビエル・ロチー其人がまた相應に名の有る且腕の有る作者である。然し此「マダム・クリサンテーム」で日本が西洋に紹介せられたといふ事は、餘り香しい事ではない。寧ろ日本を嘲弄の材料に使つたといふ傾きを免れない。従つて此小説で日本を推察して居る者は、日本を以て未開野蠻の邦だと思つて居る。尤も此小説の出たのも可なり以前の事、今からざつと二十年も昔である。此作者には此外にも「ジャポンネリー・ドートン」と題する作などがあるといふ

事で、作者の本名はルキ・マリ・ジュリアン・ギオーと云ふ人であるが、兎に角「マダム・クリサンテーム」が其の傑作の一つで、此の書は右にいつた如く日本に同情して書きた小説ではなかつた。

元來歐羅巴の文學の中に外國、就中彼等の知識と懸離れて居る亞非利加であるとか、亞米利加の土民であるとか東洋の印度支那等であるとか、ら材料を取るといふ事は、近代の一つの流行といつても可い位である。それには無論種々なる理由があつて、單に珍しいからといふ好奇心に基くものも多分にあるが、今少し深い理由もある。例之英吉利文學に付て見ても、かの所謂寫實小説心理小説即ちエリオット等の作風が稍世に厭かれて、第二のローマンチズムを要求して來る。即ち日常現實の事柄よりも、今一層自由な空想的な事柄を喜ぶ氣味になつて來る、而して如是場合には或は去つて超自然な神怪不思議の世界に入るか、またはズートと現代と懸離れた過去の世界に入るか、または我々の接んで居る社會と縁の遠い文明人の足跡の多く到つて居ないやうな社會に入り込むのが一番便利になつて來る。即ち生中な科學上の知識や、習慣道德などで制限せられてゐない、奈何な亂暴

な事も不思議な事も行はれさうに見える、いはば文明以外の世界に入らう、而して其所で自由に我々の想像に羽搏つて翔け廻らうといふ傾向になる。其の結果の一つが即ち亞非利加、印度、支那などいふ様な所を舞臺に取る事になつて來た。つまり此前に話した小説中のアドヴェンチュアなどいふ事を同じ系脈に屬して居る。冒險的な非常な事をするには、如何しても文明の社會よりは亞非利加や印度の方が行り宜い。それであるから善くいへば、斯様に亞非利加や印度などが歐羅巴の文學の中に入つて來るのは、つまり新ローマンチズムの傾向から來た事といふことが出来る。而しローマンチズムといつても、單に珍しい事や空想的な事のみを眼目として行つて居る日には、其物は文壇的の價値は漸次無くなつてしまつて、所謂通俗文學の中に墮落して下ふだらう。筋がおもしろかつたり、荒唐なものであるためにおもしろかつたりするのみであるのは、以て文學の生命とするに足らぬ。而して今日英吉利などに數多くある所の亞非利加物、印度物などは、此の通俗文學の部に屬すべきものが頗る多い。例之ライダール・ハガード等の亞非利加小説などいふものは、尠くとも半ば此の通俗文學の域に陥つたものと見ら

れる。

また今一つの根據ある理由は、同じく新ローマンチズムの脈に屬して居て、而も行き方も少し違つて此外國物を材料とする事になつたものである。それは從來の文學の中にある人物事件等が、無論例外はあるとしても、概して言つて餘りに紳士的に君子的に傾て居る、いはゞ文明的なのである。而して文明的紳士的、君子的といふやうな調子の社會に在ては、自然に激烈な感情の發表といふやうな事は比較的困難になつて來る。ワイルドな寢もすれば野性を帯びた蠻的な從て男らしいやうな人物行爲は、今少しくワイルドな蠻的な社會に一層起り易い。而して其ワイルドな蠻的な中にも人間の美といふものは見出される。現代の傾向は或る意味に於て、餘りに紳士的な溫和しい社會に現はれる人生の美に倦んで、寧ろ調子の荒つばい社會に現はれる人生の美を味つて見んと欲して居る。言はゞ一種の反動的機運である。斯様な意味からして印度の社會を材料に使つたり、支那とか亞非利加とかを材料に使つたりなどする者がある。例之今生きて居る人では、英吉利のキツプリングの如き即ち其一例で、無論渠は印度育ちであるから、從て多く

印度の材料を使ふ便利もあらうが、而し其作風が一面寧ろ死んだスチーゲンソンなどと同じく、新ローマンチズムの脈に屬すべきもので、單なる男女の戀愛問題などいふものよりも、寧ろ今少し男らしい、若くば蠻的な調子な文學を喜ぶ、其結果は、例之印度人が復讐の一念に身を燃やすといふやうな凄い調子とか、または印度に流浪して居る冒険者乃至印度駐在の兵隊などの血に渴いて絶へず闘争を夢みて居るとか、喇叭の響き鐵砲の音に狂うて居るとかいふやうな人物の胸に燃えて居る情を描くといふ風に、男性的興味を中心にして作つて居るものが多い。また極く新しいところではコンラッドなどいふ若い作者が好んで支那海などの凄味ある舞臺を自分の文學の長所にして居るなども皆此一味のワイルドな即ち野的といふところを要求して居る結果であらうと思はれる。斯様な意味からしても、東洋諸國、其他野蠻な亞非利加などを材料とするものが出て來るのである。そこで話が前に戻るが、日本を材料にして居るのは以上に述べた何の意味に中るかといふと、ピエル・ロチー物など、また引續て出て來た幾多の同脈の作は、概して好奇心に驅られたのが多いのである。即ち前に言つた様な深い意味で日本を材料

に取つたのではなく、寧ろ輕薄な、唯もう歐羅巴と違つた習慣風俗を見せるとか、渠等の眼には野蠻未開とも見える種々な異つた社會の現象を嘲弄の材料として使ふとかに過ぎなかつた。英吉利では例之目下彼の國に流行つて居る滑稽オペラの中などにも有名な「ゲイシャ」と題するものなど、皆同じ脈を趁うたもので、孰れも非常な好評を博して世界中の到る處に繰返さるゝものであるが、「ゲイシャ」の中では何所が尤も有名であるかといへば、其中に例のチョンキナの調子を取つて「チャン・チャイナマン」云々といふ歌に合はせた音楽が非常な喝采で、此部分だけ抽て樂譜になつて出て居るものなぞもあつて、これが喝采の主因になつて居る。即ち斯様な點に於て日本の音楽は歐羅巴に紹介せられたもので、名譽の次第といふべしだ。また「ミカド」と題する滑稽オペラの中では何うかといふと、是は日本の「ミカド」を嘲弄の材料に使つたもので、これにも同じく例の宮さん宮さんの唱歌など譜を付けて入れてある。要するに日本の社會を嘲弄せんとして作つた形ちになつて居る。然るに斯様な意味で日本を材料に使つて居たのが、近時に及んで漸次變つて來て、寧ろ眞面目な意味でもつて日本を材料にする傾向になつて來た。殊

に最近日露戦争前後からといふものは、倫敦あたりの寄席劇場などで出す日本物までが、多く同情的な眞面目な作になつた。亞米利加には大分斯種の物があるやうであるが、それは知らない。倫敦で見た中では記憶して居るのは、或る大きな寄席で「おマツさん」と題する一幕物にしんみりした日本物を見た事がある。また彼の當時日本にも噂になつて居つた、ツリーの演じた「ダーリング・オブ・ゼゴッツ」神々の思ひ物と題する劇の如きは、大物であつて、兎も角も日本の過去の社會を忠實に書き出さうと努めた一例である。これ等の作は近時に於ける日本物の變化の例であらう。而して此の種眞面目な日本物の部に屬する一つの例として、茲には倫敦の某座でカーテン・レザー即ち日本の中幕西洋ではこれを本物の短い場合に罕に始めに附け加て演ずるものとする、それで興行した「ゼー・ミロア」即ち「鏡」と題する一幕劇の事を一言しやう。

此「ゼー・ミロア」鏡の作者はロシナ・フキリップといふ女作家であつて、作は當時眼識ある社會に好評を博したものである。これはかの松山鏡の傳説を翻案して、これに近世的なシンボリックの意味を加へたもので、女主人公はおハナといひ、これ

に其夫ミウラと今一人トヨといふ老人を配した三人の劇であつて、すべて日本式に演つたのである。舞臺はミウラの家の體で、ミウラは片意地な若い男、おハナは無邪氣な快濶な美しい若嫁、先づ二人差向ひで、男は何か濟まぬ顔で眞面目になつて居る。女は其機嫌を取つて仇氣ない事を言つて居る。結局男が疲れた體で眠くなつたといふ。女はそれでは私が眠れるやうに唱歌を唄はふといつて唄ひ出す。唱歌の調子は西洋の調子で、合はしてゐる樂器も無論三絃ではない。唱歌の意味は下の谷に、美しい茶畑に、浮世の汚れ離れて、いとときミウラは茶を摘みじといふやうな、極く奇麗な唱歌を靜かな調子で一齣唄ふ。而して唄ひ唄ひ自分も眠くなつて唱歌の尻が絲のやうに切れて眠る。極めてしんみりとして西洋の劇の活潑なものは全然其目先きを異にしたものである。それでおハナが眠ると同時に、唱歌の後を引取つて老人のトヨがおんみの眼には眠り來れり、我は平和を齎らせりといふやうな意味の唱歌を、これも極くしんみりした調子で唄ひながら入つて來る。其老人の足音に男のミウラは眼を醒し、而して、唐突に入つて來るのは誰れかと怒ると。老人はこれに答へて、自分はトヨであるといふ。男はこれを聞いて、

あゝさうであつたか、それではお茶でも入れやうといふ。老人は其所に坐つて、何故お前は美しい妻に對して冷淡であるかと問ふ。ミウラは、自分は妻を非常に愛して居るし、また彼女の美しいのを知つて居るが、萬一自分が然う妻に打明けなから、妻は付上つて、或は自分を振り棄てるやうな事がありはしまいかと心配する、それで彼女には態と汝は醜い女であると云ひ聞せてある。といひながら壁の方を指して、見られよ彼所に繪が掛けてある、あれは先日自分が他所から持つて來た醜い婦人の繪であるが、自分はこれを妻に示して、此繪こそ汝の肖像である、汝は此様な醜い女であると偽つてある。彼女は此繪を見て泣いたが私が愛してゐるといつたので、彼女も漸く安心して氣を取直して素直に仕へて居る、なんと自分の策略は旨いものではあるまいか。とミウラは誇り顔にいふ。老人はこれを聞いて、それはゑらい策略かも知れぬが此所にお前に一つ見せる物がある。といつて自分が持つて來た一面の鏡を取出して、それをミウラに見せる。見ると、其鏡の中には立派な男らしい若い男の顔が寫つてゐるので、愕いて老人にこれは何人であるかと訊く。老人は答へて、それこそおハナが尤も愛して居る男の肖像であるといふ。

ミウラはそれを開て大に愕き忽ち顔の相が變る。すると鏡の中に映じて居る男の肖像の様子も變つて來るので、愈よ不思議がつて、ミウラはいふ、自分は何たる馬鹿であらう、今日が日までもハナは自分を愛して居る者と思つて居たが、斯んな立派な男が彼女にあらうとは思ひも寄らなんだ、自分が彼女を欺き得たと思つたのは自分が欺かれつゝあつたのだ、と自ら悔む。其問答の聲におハナが眼を醒しかける。老人ミウラに教ておハナに其鏡の中の男の何人であるかを聞けと云て自分は屏風の背にかくれる、其間に女は眼を醒しミウラの様子と異なるに愕いて何事と走り寄る。ミウラは鏡をハナに突付けて、此中の肖像の男は何人であるかと詰問する。おハナは鏡を取上て見ると美しい女の顔が映るので、これも大に愕いて、忽ち嫉妬の煽を燃やして、これは屹度ミウラの愛して居る女の肖像であらう、斯様な美しい情婦があるに、自分が壁にかけてある繪のやうな醜い女であるかと、突如と起つて壁の繪を引下して鏡の中の女の像と比べて泣く。男は異しんでそれを女とは何事ぞ、男も男、そなたの情夫であらう、誰であるかを白狀しろといふ。それで互に夫婦喧嘩の推問答があつて、終りに老人のトヨが屏風の後から再

び出て來て、言ひ争つて居る兩人を宥める。おハナがこれを見てくれといつて差出す鏡を見ると、今度は老人の顔が寫つて居るのであるから、トヨは態と冷やかに、此鏡中には唯一人の白髪の老人があるばかりで他に何物も無いといふ。此老人の言に愕き左右から若い二人の男女が窺くと、今度は三人の顔が皆寫つて居るので、再び吃驚する。ミウラは叫んで不思議な事だ、おハナの顔が其所に出て居る、そして老人の顔があるといふ。おハナは、それから實にも自分の愛する夫ミウラの顔も寫つて居るといふ。ミウラは愕いて、それが自分であるかといふ。おハナは、何うも不思議な事であるから理由を説て聞してくれといふ。其所で老人は其理由を説明して結局兩人を仲直りさせ、眞實の愛は詐りの上には宿らないから、互に眞實の自分を知り合つてこそ、其所に眞實の愛が出来るのである、といふことをそれとなく説き聞かせ、此鏡は自分が持つて歸るが、其代りとして兩人には他の鏡を殘して置くから、それを見合つて眞の愛を知れと。兩人を引寄せて、互に眼と眼を見合はして見よといふ。兩人は互の眼と眼を凝乎と見合せる。女は思はず叫んで、げにも貴方の瞳の中に私の顔が映つてゐるといふ。男も、おう汝の瞳の中にも

乃公の顔が映るといふ。老人莞爾として、兩人はそれに由つてお互を知らなければならぬ、それが眞の愛であるといふ。それで幕。

つまり此劇は、眞の自己を見合つて而して其上に愛を立てよといふので、別段大した教訓ではないが、一寸したシムボリズムに古い傳説を翻案したもので、手際に出来たものゝ一つといつて宜からう。(明治三十九年談話筆記)

獨逸現代の音楽家

歐羅巴現代の音楽家、音楽指揮者に付て一言して見るに、歐羅巴の音楽といへば尠くとも現今までの形勢では獨逸が矢張り中心である。従つて歐洲の音楽家といつても、自然獨逸の音楽家の事になる譯であるが、無論我々は自から音楽が奏れるでもなければ、其方面に深い素養があるのでないから、單に一般感美の上より門外評を加ふるのである、音楽も矢張他の藝術と同じく、原理に依り、規則に依り、技巧工夫に依つて、到達し得るものには或る制限があると同時に、其制限を超越すれば、其所は到底説明の出来ぬ、いはば生命の源といふやうな點があるに違いない。これを音楽を奏する者に付て見ると、特に西洋音楽に於ては、前に樂譜を据へて置いて奏るのであるから、其譜を読む事と指を動かす事とを學びさへすれば、誰でも其樂譜に書き出してあるだけのメロデーなり、ハトモニーなりの形式は出せる譯であるが、然しながらそれは眞の骨組または型に過ぎないのであつて、其中心となつてこれを活すもの即ち音楽の眞の妙味の方面は此外になくはならぬ。恰度我々

が字を書いても定つた字であれば、其形ちだけは誰でも同じに書き得るが、其字の良否、生死の區別は、到底其字の點の數や劃の數の説明の出来るものではなく、いはば筆者の精神がどれ位其字の中に流れ出て居るかといふ點で、其字の生死が決するのと同じ理窟であろう。即ち同じ一つの音鍵を敲いても、甲の人と乙の人の敲く刹那、其人の胸の底から發して指の先に傳はる其精神の工合で、同じ度の同じ音色の音でも、違つたものになる。况んやそれが複雑な長短高低種々の音の結合上に現はれるに於ては、到底我々の知識力で分解し盡す事の出来ない微妙な精神の發現が、其那裏になければならぬ。而して此精神表現の模様が、奏せられたる音楽の生命であらうと思ふ。

而してかの西洋音楽の樂團に於ける指揮者(コンダクター)といふ者の司る所が、即ち此精神、生命の發揮といふ事であるやうに思はれる。幾百人の樂手が集らうとも、彼等は皆それ／＼前に樂譜を据へて居る、且つそれ／＼平常の稽古も積んで居るのであるから、譜さへ同じであれば何も指揮者は要らない譯であるが、それにも拘はらず諸君の知らるゝ通り、西洋樂團には中央に一段高く臺を構へて、概して聽

衆の方に脊を向けたる一の樂長が、起立して指揮杖を盛んに打振り、兩手を躍らせてこれを指揮して居る。あの指揮者が非常に重要な位地を占めて居るといふのは、畢竟樂手の精神を指揮者の精神に統一して表出するの必要があるからである。いはゞ樂團の精神、生命の塊りが即ち指揮者である。

單に歌手または彈奏手、吹奏手としての大家は別として、現時獨逸で最も大なる音樂家、音樂指揮者は——指揮者となるには當然樂手としてまたは作樂者として、先づ樂團を心服せしむる程の高き位地に上らなくてはならないのであるが——例へば先年までグリンの帝室オペラのテリゲント即ち指揮者たりしハンス・リヒター、また現にライプチヒ大學の音樂教授たるアルツール・ニキツシュ、またはベルリン帝室オペラの指揮者たるカール・ムツク、または同じくリヒャード・ストラウスなどは尤も著名なものである。

リヒターは、今は確かパレの音樂會の指揮者であつて、またリヒター自からの大きな音樂會なども組織せられてある、英吉利へ獨逸のオペラ季節が終つて後獨逸から第一流のオペラが渡つて來る時などは、よく此人が其指揮者となつて來る。ニ

キツシユは、折々ベルリンなどへ出て来て大音楽會を指揮する。ムツクは、今も帝室音楽を専ら指揮し、またストラウスと共に年々のベルリンの帝室オペラを交代して指揮して居る。然し今茲に専ら話して見やうと思ふのは、此最後に掲げた一人たるストラウスに就てゐる。

ストラウスは一八六四年の生れで、まだ壯年であるが、渠が作樂家としての地位は、人に依つては獨逸第一と判定する人すらある。此人がデリゲントとしての得意は、ワグナー物、就中其ツリスタン・ウント・キソールデなどであらうと認められて居る。此人の作つた音楽が、吉英利の公衆に殆んど初めて價値を認められたのは、恰度私の彼地に居た頃、即ち兩三年前の事であつたと記憶する。當時の批評に依ると、此人の樂風は、つまり十九世紀末の時潮を遺憾なく發揮したもので、例へば感傷多恨にして情に富んだ所は、或る評家が呼んで音楽會に於けるシエリーといつた如き調子あると同時に、斷えざる精神の不安、懷疑、煩悶に合せて一種の冷笑的滑稽的の所を加へたものといはれて居る。其作のフイエルスフート其他一二のオペラを除いては、専らシンフォニー音楽で、其主なるものは、チル・オイレンシュビエール、

またはトット・ウント・フエヤクレーリング、またはアイン・ヘルデンレーベシ、またはアルゾーシユブラツ・ハツアラツトストラなどである。中にも此最後のもの即ちツアラツトストラは、かのニイチエに落想を得たもので、曾て渠がロンドンへ來た時に尤も熱心に奏でたものはこれであつた。此音楽に於ても、渠が思想をそのまゝ、音楽に打ち出さんとする力、又音の激越なるものを好んで使ふワグナー式のところ、又其一種佛敎的悲觀の調子と呼ばれた調子の中に、人生の形骸に包まれて居る精神が、赤裸々のまゝ、形骸を破つて突き出んとする趣を寓したる等の特色は、能く現はれて居ると評せられた。或る評家のいつた如く、ワグナーが感情の人間を音楽にしたとすれば、ストラウスは思想の人間を音楽にせんとして居る。批評家のいふ所に従へば、此ツアラツトストラは、先づ單純な音を以て大自然を謠ひ、それから進んで人間の靈魂の偉大なる追慕、憧憬および其歡喜悅樂の情熱を歌ひ、而して高遠なるツアラツトストラが青年の歌に及び、延いて靈魂の煩悶憂愁より生ずる知識の問答(フエーグ)に及ぶまで、原詩の高大なる精神が歴々指摘せられる程に調へ出されて居るといはるゝ、然しながら一方には殊に英吉利であるからして之れに

慊らず思ふ批評家もある。渠等はまたストラウスが時代精神病から脱出して、更に大なる音楽家とならんを望むといふやうな事をいつて居た。兎に角渠は前途尙長いから今後如何に發展するかは世界の注目する所であらう。終りに臨んで渠が當時英吉利の新聞記者と論じた事柄の中に、渠の美論ともいふべきものがあったから、其大要を抜て置く。

渠曰く、音楽には絶対的の美とか、絶対的の醜とかいふものは無い。美とは畢竟自分が真に感じた事を真に發表するの謂である。畢竟藝術は爲し得るだけの力があつて、それを十分に成し遂るといふ所に生ずるものである(クンスト・コンムト・フオム・ケンネン)。従つて美の理想といふものは漸次に變じて行くもので、今日美と感じたものも明日は美とならざる事がある。例へばワグナーの音楽にある不諧音の多くの如きは、最早今日の我々には不諧音と感せない程になつて來た。また日本人や埃及人等の喜ぶ所の音楽は、我々の耳には唯雜然たる騒がしき聲なるに過ぎず。されば音楽家は、要するに自分の思ふ所を如何にして十分露ひ出し得るか、と苦心すれば宜いのである。我々の思想を觀照する所に生ずる感情をば、音に

現はす、其力のあるものが即ち音楽家である。といふのが即ちストラウスの音楽論の大要である。(明治三十九年談話筆記)

英國最近の繪畫に就て

英吉利に於る繪畫界の最近の事に就て少しお話しをいたさうと思ひます。英吉利には例の如くナショナル・ガラリー即ち國民畫堂といつて非常に宏大なのが倫敦にある、で古今内外の名畫を随分澤山に蒐めて居る、佛蘭西のルーブルに比べては劣るといふ人もあるが、而し倫敦には倫敦の特色があつて、其の繪畫の排列方などについても、特殊の工風を凝らしてゐる、兎に角世界で二番とは下らない大畫堂の一つである。それで尙この畫堂の外に今一つテート・ガラリー即ちテート畫堂といひましてテートといふ人の寄附に成つた國民畫堂の支部の如きものがある、其方には最近の繪畫ばかりを集めてある、で倫敦などへ一寸見物に行つた人などが、往々國民畫堂の方ばかり見て、テート畫堂を知らずに歸る人があるが、愚な話してせう、英吉利に於る最近繪畫の大作を見て置かなければ、英吉利の畫を能く見たとはいはれない、それで此二つの畫堂は展覽會で價值の定つた模範的の傑作しか收めないが、此外にもまだ小さい畫堂又は繪畫陳列所で、古いものの中々

好いものを集めた所も澤山あります、例せばウォォレス・コレクションといふ陳列所の中の繪畫部に於る近世の佛蘭西畫などは、國民畫堂のよりも勝れて居るといはれる位であります、而し英吉利繪畫の壯觀は國民畫堂及テート畫堂に於て其大體を窺ひ知る事が出来ます。而して斯様に立派な繪畫を年々撰り出す展覽會は、是亦何人も知る所のかのローヤル・アカデミーでありまして、年々春の末から夏の始めに於て開かれます、夫れ以外にも會は随分ありまして、水彩畫協會展覽會であるとか、油繪協會展覽會であるとかいふやうな者が其主なるものですが、就中ローヤル・アカデミーに對して有名であり若くは尠くとも過去に於て有名であつた展覽會は、ソサエティー・オブ・ブリチッシュ・アーティストス、即ち英國美術家協會の展覽會でしやう。

で前申したローヤル・アカデミーは今から丁度百三十四年前に創立せられて、帝室保護の下に随分時としては不公平な處置もあつたのでしやう、ソコで夫から五十年ばかり経てこれに反抗して起つたのが、即ち右にいつた英國美術家協會展覽會である、此方もローヤル・アカデミーと随分激しい競争をした後遂に帝室保護即ち

ローヤルといふ名を冠することを得る展覽會になつたのです。英吉利の繪畫の特色といへば景色畫であるとか、亦は水彩畫であるとかいふやうに一般に認められて居ますが、それと同時に肖像畫も却々勝れたものが昔からある、これは畢竟寫實的といふやうな風格が總じて英國文藝の間には從多くあるが爲め、自から斯様な方面に傾き易いのかも知れぬ、而しそれと同時に例へばターナーの荒れたる海の景色畫等には寫實といふ域から脱して、作者の非常に強い感情そのものを之に寄せたといふやうなものもある、亦たレーノルズの「唱歌團」即ち天使の圖であるとかいふやうな理想的な畫も随分勝れたものがある、これらは過去の事であるが、現在に下つては例のラファエル前派の衰へて以來、寧ろ寫實的、就中肖像畫などが一時全盛を極めて居ました、其頂點を示して居る人はサーセントでせう。此人の出世作といはれる畫は今から二十年ばかり前に描いた「カーネーション」リリー、ローズといふのであつて、其年のローヤルアカデミーに大喝采を博したものである、これは友人なる或る畫家の家で二人の少女が提灯を點して花園で遊んで居た、それを見て感興が浮んだので、續て二三夜これと同じ景色を

繰返さして貰つて、それを寫した畫である、これが七千圓ばかりに購はれてテート畫堂に收められたので、此畫なども單に寫實的といふよりも餘程リ、カル——即ち抒情的といふ趣のある好い繪である、即ち花園の……日本でいつたら夏草の露しどよなる中に二人の可憐な少女が日本のプラ提灯を點じて少女の一人がそのプラ提灯を手にとって上から窺いて居る所、周圍の青み涼しみの勝つた景の中心に赤い提灯及其提灯の火の光りの反射した顔といふやうな取合はせて、確かに少女の衣服は白であつたと思ふ、就中提灯の赤い色の出し方などが普通の赤さでなく、一種味ひのある赤みが出て居る、これは中心に全幅の景色が如何にも觀者の魂を其の中へフウワリと浮び込ませるやうな味ひである、で斯様な畫も描くが併し此人は現時では英吉利第一の肖像畫家で、同時に世界の二と下らぬ肖像畫家である、獨逸のレンバハなどと并稱せられ、確か獨逸の皇帝も此人に頼んで肖像を描かしめられた事があつたと思ふ、私の英吉利に居た間のローヤルアカデミーの展覽會でも此人の描いたチェーンバレン夫人の肖像などは善惡ともに尤も世評の集まる集點であつた。

それで此人の肖像畫風は、例のダッチ・スクール即ち和蘭派の肖像畫の系脈ともいふべきで、背景其他の全體を極黒ずんだ力と重みを專一にしたやうなライト・エンド・シェードの使ひ方である。又近世肖像畫の泰斗といへば西班牙のヴェラスケスも其一人であるが、サーゼントは、ツマリ尤も此人などに私淑して居たので、皆要するに相通する所ある畫風です。サーゼントの描た肖像畫を見ると、其肖像そのものがキヤラクタリスチック即ち特色的であると同時に、其手法が亦た非常に強い特色を持って居つて、展覽會に出た或肖像畫を美術眼の無い普通の觀者はまだ完く出來上つて居ない畫かと思つたといふ様な話もある。要するに肖像畫といへば、たゞ寫眞のやうに其人の顔に似れば能いといふだけなれば、既に寫眞を以て足れりであつて是れ以上に似させるといふ事は出來ないのであるが、若しこれを美術にしやうといふには其寫される人の特色が能く捉へられ、説明せられてあると同時に、畫家自からの特色が亦た其中に出て居なくてはならぬのである。これはいふまでもなく凡ての文藝に通じてさうであるが、サーゼントの肖像畫なども右兩面の特色が現はれて居る、そこが此人の一代に傑出して居る所以である。

次に此人の癖を一寸申して見ますと、此人は寫すべき人に向へ据へて肖像を描くに最初の間二三度は必ずムダをさせる。又た筆を執つて其人の前に立てても氣が進まない、と筆を抛て洋琴などを弾き始めて、自分の氣分が恢復して來てから取りかゝるといふ風で、随分これに不平をいふ人もあるさうであります。而し結局何程面倒な思ひをしても此人に描て貰へば一代の名譽といふので、立派な人達が盛んに此人に肖像畫を頼むのでありまして、やう又た此外にリギーアであるとか、オーチャードソンであるとか、ハーコマリであるとか、ウオターハウスであるとか、シヤンソンであるとか、彼の地で有名な畫家は數へ切れない程ありますが、ローヤルアカデミーの會頭であるのがポインダーといふ畫家でありまして、此人に就て一寸お話しいたしましやう。

本來の此人の畫法はどちらかといへばクラシカル即ちやゝともすれば形の勝つた方の、いはゞ整然とした畫風であつて、それと同時に亦た題目も希臘物を取るのであるが、近年サーゼントなどの風にかぶれて肖像畫などを随分描いた、然るに最近恐らく世間の種々の風潮などに感じたのでもあるか、又ローマンチックとクラ

シカルとの中間のやうな題などを描きました。二三年前の展覧會に出した暴風雨の女神の窟などは、即ち其例である。而しこれは餘り評判がよろしくなかつた。に、又た今年の展覧會などには多く純粹な希臘的題目を撰びました。此人の外にアルマ・タデマといふ大家がある。これは又た非常に綺麗な小い幅の繪の名家であります。が、二三寸四方の中にあらゆる色の寶石を鏤めたといふやうな畫風であつて、纖巧美麗といふ方では、まづ其頂上を示した畫風でありました。やう、一二年前の展覧會に出しました繪など、それは例へば美しい女が恍惚として大理石の石垣の前に立つて眺めて居る。下は同じ磨き上げた大理石の石壁の真中に池をたぐんで、其池には金魚が碧い水を透いて見へて居る。これを一とつの小幅にしてあるので、其色の配合からいひましても、線の取合はせからいひましても、優美でそして唯もう綺麗であるといふ事は想像が出来るでしやう。序に言ひますが、此人は元とベルギー人で、英國に歸化したのです。

以上の畫家はローヤル・アカデミーの正會員であるが、其外一層新しい即ち補助會員であるとか、亦は全く會員外から出た人であるといふ部類の畫家にも随分勝れたのがあります。

また近年物故した畫家に就て一言陳べて見ますと、先づホイットスラーとワッツとが最も大なるものでありました。やう、ワッツは一方にラファエル前派、印象派の消長をも凡て經過したと同時に、所謂ネオ・ヴェネシアン即ち新ベニス派の畫風を興した畫家であつて、即ち昔の伊太利のチ、ヤンなどが描りました跡を趁ふて、特に大幅の壁一杯のやうな所謂壁畫風の繪を描きました。で壁畫風である結果は強い大きな鮮な色を使ひこなすのに非常に特色を有つて居る。一寸茲に壁畫といふ事で思ひ出すが、日本畫といふものを壁畫風としての研究といふ事は面白い問題であらうと思ふ。さてワッツは其畫風が壁畫的であると同時に、其題目も所謂寓意畫若くは宗教畫の部面に屬しまして、これで一代を風靡したものである。がそれが近時の寫實的風潮の爲に一時稍蔽はれて居た。然るに此三四年以來亦々大に理想的若くは寓意的といつたやうな畫風が盛り返して來かゝつて、今更のやうにワッツを説く者も出て來たのです。此人は地位からいつても年齢からいつても、英國畫家の第一流でありましたが先達て亡くなりました。

前申したテート畫堂へ行つて見ますと、特に大きな一室が此人の畫ばかりで充たされて、ワッツ室といふのがあります。此人の繪で尤も有名なのは、希望と題するもので、地球の上に一人の人が目かくしをして腰をかけて居る、即ち希望は盲目なりといふ心から思ひついて種々の深い意味を其中に籠めたのであります。蓋しワッツの主義はかの一派の人等が唱へた、美術は美術の爲めといふ主義に對抗して、美術は必ず人を教へ導くといふ宗教の如くならざるべからずといふ立脚地に起つたもので、此畫風が最近時に於て再び世人の注意を惹く様になつたといふ事は、以て世の風潮の一斑を察するの材料になるでしやう。尤も此畫風繼承者としては、バィアム・シヨールなどいふ人がありますが、到底ワッツほどの大作は出來ないのであります。たゞ現に去年の展覽會などにでも、デスバイズド・エンド・レゼクテッド・オブ・メン即ち人間に嫌はれ退けられたりといふ題目で出た宗教畫が、非常な注意を惹いたなどいふのも、幾らか此同じ傾向に係したものではないか、勿論所謂宗教畫即ち宗教的題目を畫くものが目今の時勢で再び大に行はれやうとは考へられないのであるが、兎に角肖像畫風のものに飽きたといふ氣味のあることは事實でせ

う。而して上に言つた繪は中間に基督が十字架にかゝつて居て、其周圍を種々なる種類の人がこれに對して或は怖れ、或は惡み、或は笑ひ、或は冷淡といふやうな様々の表情をして過ぎ行くといふ圖柄であります。それからワッツと共に前に名を擧げて置きましたホイッスラーは二三年前に死んだのであるが、同じくワッツと相對すべき大家で之はラファエル前派の中から出て、寧ろインプレシヨニスト即ち印象派の或る部分をも取り入れ、就中日本畫の影響を澤山に享けた人である。此人はかの一時美術批評界の泰斗として仰がれたラスキンと不和であつて、それが爲めに一層名も世間に知られた人である。寧ろ其不遇な地位にあつた爲め、ローヤルアカデミーに入ることが出來ず、爲めに自ら反抗的態度を取つて、故意に其繪をこれに出さなかつたのであります。でそれがためテート畫堂などにも此人の繪は一つもありません。却つて佛蘭西のルクサンブールの畫堂などに此人の名畫が残つて居ります。英吉利でも其人の死んだ今日始めて此人の繪を畫堂に入れやうと焦つて居ります。ラスキンと不和であつたといふのは、今から四十年許りも前の事、ホイッスラーの繪をラスキンが評して、

こんなにも只繪の具を公衆の前に廣げてそれで繪といはれるならば天下何物か繪でないものがあるぞ、といった意味の非常な猛烈な攻撃を加へたので、ホイッスラーも頗る怒つて遂に裁判沙汰になり、ホイッスラーは一フアシング即ち日本でいへば文久錢一文の損害要償を受けた。是等の事實がホイッスラーをして一層有名ならしめた一理由であらうが、兎に角老熟に及んで、此人の畫風が其昔のマンネリズム若しくは癖から脱化して、一派をなすに到つたのは争へない事實である、例へば色をホィヤリとなすつて、其中に自から川向ふの市街を見せたり、山を見せたりする其外凡て色の使ひ方に特色を有つて居る、これが尤も多く佛蘭西の印象派及日本畫から享けた影響なのでありましやう、其外此人の描いたものには日本に關した題目のものもあります、それらは風韻があればあるといふものゝ格別好い繪とも思はれませんが、此の人の描たもので尤も有名な一とつは其母の肖像で、これは今巴里のルクサンブールの畫室にかゝつて居ります。

此外ラファエル前派の末及印象派の末、ポインチリストの事などに就ては其中に亦た陳べる機會もありましやうと思ひます。(明治三十九年談話筆記)

繪畫談

日本畫の歐羅巴繪畫界に及した影響に付ては、近時我邦でも多少議論があるが、尠くとも傳彩法で、日本畫の影響が歐羅巴の繪畫界に現はれたのは争ふべからざる事實である。でそれが如何に大に、而してまた如何に長く續くべきかは、精細に研究しなければ斷言する事は出来ませぬが、日本畫の流行の最も盛んであつたのは、今から二十年許り前であると思ひます。無論日本畫といつても此場合には、北齋歌麿などを主としたものである。で其以外の趣味は甚だ多く解せられて居ない。亦今でもそれ以外の畫風の日本畫を如何なる程度まで咀嚼し得るか、亦これを咀嚼し得る者の數が如何に多くあるかは問題であります。二十年前の書物や雑誌を見ると、次のやうな事が言てある。即ち

日本の美術特に北齋の如きは、今や本國日本では却て輕視されて、歐羅巴で眞の研究が盛んになつて居る。而して例へばホイッスラー、チッソー、アルバート、ムーアの如き、皆日本畫の影響を受ける事の大なるを、自から承認して居る畫家である。

今の處歐羅巴に於る日本畫の流行は、ファッション(流行)といふよりも、寧ろクレイズ(熱)といふ程の位置に達して居る……。

右の内でも就中ホイットスラーが近年に於る英國の大家で、而して日本畫の影響を最も多く受けた人である事は此前回にも一言しましたが、佛國では例のアンブレシヨニズム(印象派)……特に其印象派から進んで行つた所の新アンブレシヨニズム若くはポインチリスト(點彩派)に到つて日本畫の影響を最も強く感じたといはれて居ります。然らば日本畫の影響が如何なる風に出て來たかといふに、前に申した如く専ら色の上にそれが見えて居るのであつて、特に全體の色の調子を鮮かな對照色のまゝで統一して見せるなどの事を工夫して居る、これが日本畫の彩色法から生れた一つの結果であるといはれてゐる。然れども之れと同時に此節日本で能く行る、寧ろ輕薄な、淡彩を使つては、かすといふやうな行き方は、歐羅巴の人は却て好まない。或る美術眼の有る歐羅巴の婦人が曾て言つた事がある。日本では日本固有の色の塗法が漸次減んで行くやうではないか。あの昔の浮世繪な

どに出で居た所の、強い而して味の有る色の塗法は、近來の日本畫には餘り見られなくなつて、我々歐羅巴の人が何時でも眞似の出來るやうな、佛國あたりへ往けば何程でも見付りさうな色の塗法ばかりが流行つて居るやうではないか。我々が奈何して斯様強い一種特得な美しい色を日本人は出し得たかと思つて研究して居る古い彩色法が、近來殆んど見られないのは残念である。と言つて居つた。日本畫の中で歌麿は暫らく措き、北齋があつた如く、歐羅巴に歓迎されたのは、曾て誰かも言つて居た如く、主として其畫いて居る題目が、近世の歐羅巴の文藝に通じた特色である所のネチュラリズムと通ずる所のある點であらうと思はれる。即ち寧ろ題目を下層社會若くは普通に見醜いやうなありふれた社會に取つて、それを其儘に寫して來る意味が北齋などが似て居る。従つて彼れの畫は日本繪畫の中で最も寫實的であつて、且題目が活動のある社會を現はして居る、或る意味で強いキヤラクターリスチックなエキस्पレシヨンを持つて、畫がすべて動いて居る。これらが歐羅巴人に喜ばれた所以に相違ないのであります。

日本の繪畫を見て無論其特色が、アイデアリスチックで且デコレーチヅ(裝飾的)であ

る點に存して居ると認めるのは識者の説であるが、一般に言つて其アイデアリスチックである中にも、尙一味の寫實を求めるといふのは彼等の傾向であつて、寫實といへば語弊があるが、寧ろ生命……其生きた所を求める其點に於て、稍もすれば日本畫は其要求に應じ難くなる。餘りに人形的になつて居て、多數の人は日本畫は皆左様のものと思つて居る。或る時私が大學の教授に『國華』の中に出て居た畫を數々見せた所が、其の中で一番先に取り出して歎賞して止まなかつたのは狙仙の群猿の畫であつた。で日本にも亦斯様な寫實派の畫家が居るかといつて酷く感心して居つた。以て歐羅巴人が如何に心の底に寫實を求むる傾向のあるかは想像せらるゝ所であらうと思ひます。日本の繪畫の線の妙味といふものは、多數の歐羅巴人には解つて居ないのが多い。勿論日本の線畫も線のみに餘りに重きを置いて見て行くと、始めの中はよいが往々嫌になつて來ることがあります。が兎に角日本の線畫は、畫に生命を認めた上でなければ好い味が消える。然るに西洋の普通の人が線畫を見ると、畫の上の生命を見得ないでかの國に於る窓畫の類と早合點をして丁ふ。西洋では窓畫といふのが、重大の地位を占めて居る一種の裝飾美術であつて、例へば寺院の窓などの玻璃に描くものである。これが色と色との間をば常に太い黒い線で區劃を立て行く。畢竟これは光線を透しての裝飾の意味が主であるから線には何の意味もない、線は唯色の境目である。然るに日本畫の線をば直ちにこれと思ひ比べて了うからして、日本の線畫を窓畫と思ひ做して了ふ、亂暴な話であります。

亦た或者は曾て雪舟の畫の寫真版を見て、要するに渠の畫は悉皆スケッチではないかと言つた。それは理由のある事で、例へばかのレンブラントのスケッチの如きは、今非常に尊いものになつて所々の畫堂に集つて居るが、これ等は誰が見ても殆んど日本で言つたら雪舟などの畫を見ると全じ心持ちである。亦た去年死んだ獨乙のメンツェルなども眞物の油繪なぞよりも却てその下繪やスケッチの方に餘程おもしろいものがある。これ等が或る意味で日本の雪舟派などの墨繪と似通つた所があるやうに、歐羅巴人には見えるのであります。

佛蘭西のアンブレシヨニズムと、英吉利のラファエル前派とは、種々の點で全じ運命を有つて居る氣味がある。特に其出立點が一種の寫實主義若くば自然主義であ

つて、而して確に其一面をも畫風の中に所有して、而も大體の調子は却て其反對のローマンチズムとか、理想派とかいふものに近いといふ結果になる點なぞ、兩方とも似て居ります。佛國の印象派は或る評論家の言に従へば、かのコロヤルソ一等のローマンチズムに反動して起つた結果といふのでありますが、兎に角始めの旗幟は寧ろ極端に、科學的な寫實的な精神から來て居た。即ち色彩の上で我々が普通にローカルトーン(部分色)を存在して居るものと認めるのは間違ひであつて、これ等は光線の我等が眼を刺戟する其價值に由つて出來る相違に過ぎないので、畫家も亦た其畫の上に直接に部分色を塗るのは自然の方則に違つて居るから畫面には唯二つか三つかの原色を塗つて、それが我等の眼を刺戟するに及んで始めて我々が普通に考へて居る明暗の度、即ち光線の價值が種々に現はれて來るやうに爲なければならぬといふのが根本の意である。即ち非常な寫實派たる所以である。然れども其結果は全體の畫面が極大まかに一調子の色でもつて描き出されて居る。近くへ寄つて見れば細々した形ちはなく、離れて見ると全局の上に種々の景色が出て居るといふ面白味になつて來て居る。ラファエル前派の畫で

も始めは正直に誠實に、自然を寫すといふのが標榜であつて、細かい點に於ては極端にまで寫實を行らうとしたのであります。全體の調子に於ては、反對なローマンチクな強い情緒の表現を主にした畫風になつてしまつた。これはラファエル前派の畫家の中でも専らロゼチ及バーン、ジョンズの畫風から來たもので、これを普通にロゼチ、ツラデションと呼んで居ります。

それで印象派は當に今尚ほ繪畫壇の主要な地位を占めて居るばかりでなく、歐羅巴の凡ての畫風に影響を及ぼして、如何なる畫風でも多少印象派の響影を彩色法の上に有つて居ないものはない位であります。之れに反してラファエル前派の方は、印象派よりも更に多く其盛りを過ぎ去つて了つた意味がある。然れども勿論今尚ほ後繼者は、例へばケーレー、ロビンソンとかバイアム、シヨールとかいふやうな若手に命脈を續けて居るのであるし、他の畫派に影響を及ぼしたことの大きなは、何人も認める所でありませう。且最近數年に於て、此畫派の畫は夫のワッツの畫風などと双んで、再び世の注意を惹くやうになりかゝつた氣味があります。尤もラファエル前派の榮えたのは一千八百五十六十年頃であつて、其尤も衰へた頃と思はれ

る十年許りも前の書物を見ますと、ラファエル前派は今や一つの冗談と認められて、これを名告るのは耻とする風があるとすら言つてある。それが最近の思想界の傾向に伴れて、亦た稍復活し來らんとする氣味なのでしやう。(明治三十九年談話筆記)

新裝飾美術

前回の記事の中で日本の繪畫が概してデコレーチヴ即ち裝飾的であるといふことを一言した。これは勿論内外人共に夙に認めてゐる明白な事實で、我が美術の特徴が尤も此方面にある事も同じく承認せられて居る。日本人の繪はすべて模様になるといふ事は、西洋人の屢次言ふ所で、是れは一方から言へば貶した意味になり、一方からいへば其模様の裝飾的の所に特色があるといふ意味にもなる。かの有名な美術史を書いた佛蘭西のリュケは、日本の美術は自然主義のもので一種の空想的自然主義になる。というたと記憶するが、此點が即ち日本の裝飾的美術に異彩を與ふる所以である。例へば同じ燭臺の足を拵へるにも普通の西洋の型で行けば、無意味な一本の棒を立て、それに種々な唐草模様とか、今日でいへばアールヌーヴオーとか、其他曲線直線の美を絡ませた位の裝飾をするのが關の山である。然るに日本の意匠になると、直ちに燭臺の軸が燈の立つてゐる形になり、蓮の葉の展た形になる。即ち裝飾的美術でありながら、一面寫實的美術の精

神を取つて、それを或る存在物の形ちに寫し上げてしまふ。其所が即ち裝飾界に於ける一種の自然主義である。これも勿論今日と言ふに及ばず昔の西洋の器具類にでも絶へて無い型とはいへぬが、極めて乏しい、それが日本に於ては尤も多く見るべき裝飾美術の方式である。また雷にかやうな裝飾的自然主義の美術のみならず、其外に出でて日本に於ては尤も特色が發揮せられて居らう。即ち固有の色彩に於て其特色があるのは申すに及ばず、線に於て尤も特殊の點が現はれて來て居る。これは色々な理由もあらうが、一つは例の日本畫從來の特色であつた所の線畫の久しい熟練からして、美術家の所謂線のムーヴメントに一種獨特の造詣があるからであらうと思はれる。で、あるから將來繪畫彫刻などに併せて我工藝的美術、就中裝飾的美術の上には左程骨を折らずして尙十分の新活動を世界の舞臺に演ずる事の出来る理由があると思はれる。今でも随分大きな店では行つて居るといふ事であるが、尙一步進めて斯様な意味での意匠鍊磨を専門とする大きな團體の如きものでも組織したら有益であらうと思はれる。たゞ斯やうな場合には、彼の固陋な國粹保存や淺薄な西洋趣味迎合や、俗惡な東西折衷

やの以上に立つて大局の上から將來を豫測するだけの見識を持つて仕事をするのが肝腎である。

それで此日本の裝飾的美術といふものが、西洋の裝飾的美術に影響した今までの著しい現象の一つは、即ちかのラールヌーヴォー又はアールヌーヴォー即ち新藝術と通稱せられる一種の模様法である。元來此十九世紀の後半に於る歐羅巴の裝飾美術界には、先づ二つの大きな新勢力があつたと言つて宜しい。其一つは即ち右のラールヌーヴォーで、他の一つは英吉利に於るウリヤム・モーリスの裝飾美術である。で、普通には此ラールヌーヴォーは、其名が示して居る如く、佛蘭西を本元にして世界に廣つた新藝術のやうに一寸思はれるが、然しこれには種々説を立てる人があつて、必ずしも然うとはいへない。一八九七年に佛蘭西で、ラールヌーヴォーと號して一つの展覽會様のものが開かれて、デラエルシユ。ダルペーラト。ダシムスなどいふ美術家等が、始めて室内裝飾器具などの新藝術の發表をしたといはれて居ますが、然し此時の新藝術の中から果して今日の所謂ラールヌーヴォーの模様裝飾が、始めて其端を發したのであるか如何かは解らない、私は寧ろ元と

ケンブリッジに教授をしてゐたチャールズ・ワルド・スタイン氏が、三四年前に公にした説の方を確なものであらうと信ずる。であるから、今左に其の説を参酌して大略を話して見やう。が、全體ならば其前にアール・ヌーヴ・グオー其物の説明をして置くべきであらう。佛蘭西のラ・ファガローの一記者は、曾てこれを呼んで「ヌーヴィーユとムートンの骨との美術」即ちうどん菓子と羊肉の骨とを継ぎ合せたやうな美術といつたと言ふが、然し今日は日本でも既に廣く行はれてアール・ヌーヴ・グオーといへばあれかと人もうなづくやうになつて居るから略しませう、唯此の一種の裝飾法が、歐羅巴の到る處に瀰満して居つて、大陸諸國は勿論、英吉利などでも近年特に盛んに行はれて來て居る。或る英吉利人が數年前に言つた事に、大陸に旅行するとホテルの壁も天井も階段の欄干もテーブルの上も床の敷物も盡くクル〜と渦を卷いたやうなアール・ヌーヴ・グオーであるから目が廻るやうだといつて居ましたが、全く事實其通りである。最近時大陸では既に稍此式が飽かれんとしつゝあるとの説もあるが、それは未だ然し事實の上には現はれてゐないといつてよい。目下に於る裝飾界の最も大なる勢力は矢張これである。それでワルド・スタインの曰ふ

には、歐羅巴就中英吉利の室内裝飾の意匠界に革命を起した所のモーリスの勢力は、矢張それに次で同じやうな革命を起した所のアール・ヌーヴ・グオーにも及んで居る。アール・ヌーヴ・グオーはモーリスの裝飾美術と日本の裝飾美術との結合である。といつて、そして尙、いはく何も此の美術の元祖を争ふといふ譯ではないが、想ふにアール・ヌーヴ・グオーは、本來亞米利加から來つたものらしい。それはかの一八七五年費府で博覽會のあつた時に、諸國の美術が同地に集つた、そこで從來亞米利加に於る陳腐な室内裝飾法に倦きて居た、渠亞米利加の美術家等は、其新奇を求むるに熱心な眼をば、英吉利のモーリスの美術に注ぐと同時に、日本の同じい美術に注意して、茲に此二つのものゝ結合を企て、そして出來上つたものが今日のアール・ヌーヴ・グオーと呼ばれるものゝ萌芽である。そして就中此裝飾法をば木彫物などに多く試みて見た。で、このアール・ヌーヴ・グオーの萌芽は漸次發達して來て、かの畫家エリッ・ヴラダールが有名なエドワード・ド・マキッセルの翻案した波斯の詩人オマール・ケイヤムの詩文の挿畫を描くに到つて尤も明らかに、斯様な流派の起りつゝあつた端緒を示した。而してまた恰度同じ頃に發刊せられた、センチユリー・マガヂーン

といふ雑誌の表紙の裝飾が尤も明らかに此式を示して居た。而してアールヌーヴォーの模様法は實に専ら此雑誌の表紙などか媒材になつて、歐羅巴大陸へ入り込んだものらしい。それが却て今日では佛蘭西を本家と思ひなされるやうな形勢となつた。といふのが右のチャールス・ワルドスタインの考證である、然し果して其起元は、亞米利加であるか、將た佛蘭西であるか、これは別問題として、アールヌーヴォーの中に、日本の線のムーヴメントの入つて居る事は、争ふべからざる事實であると思はれる。序でだから一言して置くが、モリスといふ人は、知らるゝ通り英吉利の繪畫壇に一新派を立てた所のラファエル前派の鏘々たる一人で、ロゼツチ・パインジョーンズなどと及び稱せられ、且詩に於てもロゼツチ等と同じく立派な地位を保つた人である。で本來が意匠専門家で、此人の意匠の脈は寧ろゴシック即ち歐羅巴に於る古來の美術の系統中で尤も男性的な剛健な所を特色とした様式に屬するもので、此の人が新しい裝飾意匠を案出して、大きな會社を建て、壁紙から窓畫器物の模様などに到るまであらゆる室内裝飾に新しい趣味を開發しやうと力めた結果、英吉利の裝飾美術は大變化を惹起し、近世の英吉利乃至歐羅巴の室内装

飾の主なる様式は遂に此モリス式に成り了つた。であるから先づ今日の所就中英吉利の室内裝飾などは、モリス式か然らずんば頗るハイカラ式になつて、アールヌーヴォーといふ趣きである。其外アールヌーヴォーと離れて、日本趣味といふやうなものも入つて来て居ないではないが、而しそれはまだ歐羅巴に於る裝飾的美術界の一派をなすといふ程の地位には達して居ないのである。將來願はくば其地位に達するの日あらんことをといふのが我等の希望である。(明治三十九年談話筆記)

英國劇と道德問題

これまでも幾回か繰返して話した通り、眞面目な演劇といへば歐羅巴では、今以て或る程度までイブセン式の所謂問題劇の色を帯びて来るものが多い。換言すれば眞面目な世話狂言の落想は、多く社會問題——といへば種々の語弊が生じまじやうが、寧ろ道德問題即ち人生根本の道德觀を取扱ふこととなるのです。

イブセン風の演劇は最早時代が過ぎて居ると観る者が、西洋にも無いではありませんが、實際に於ては前に申した如くまだ中々重要な位地を占めて居ります。

私は今之れが一例として英吉利の最近時に於ける新作の演劇二ツを取つて什麼風に彼の國の演劇壇が此の傾向に觸れてゐるかをお話することにいたしましたやう。

勿論根本の着想又は觀念はイブセン式であつても、これを取扱ふ方式又は風格といつたやうなものは、自然に其作者により、其國民によりて異つて来る譯であります。英吉利の作者がイブセン式の劇を書くといへば、其根本觀念がイブセン式で

あると同時に、其外形若くば風格も自から英吉利式になつて來ざるを得ない。獨逸人の書くものは自から沈痛の氣を以て勝り、伊太利人の書くものは自から色彩に富んで居るとか、諾威人の書いたものは、自然沈鬱の色を帯びて居るといふやうな工合に、英吉利人のものは自から軽くなつて來る。其歸結は概して喜劇的に、または軽い悲哀を中心にしたものになることが多い。

それで茲にお話しまするのは、二ツとも先づ喜劇といつて宜い、で然もイブセン式である所が、英吉利劇の面白味のある所であります。加之こゝに、お話する二ツの劇は道德問題を中心にして居るものとはいへ、自から異つた反對の道德感念を現はして居ります。一は其道德問題の解決の工合が寧ろ快樂派であるし、一は其解決が道德的である、即ち尤も對照するに趣味のある二つの劇であると思ひます。それで一つの劇は、兩三年前に倫敦のヘーマーケット座で演つて非常の喝采を博したもので、外題は「カズン・ケート」(姪のケート)といひます。作者は當時英吉利の若手の劇作者として賣出した一人で、デーヴキスといふ人であります。で此劇は都合三幕で成立つて居りますが、其筋の大略を申し上げますと、序幕がアミ

といふ若い女の家の體であります、此アミーの父は既に彼女が幼き時に亡き人となりまして、現在は母と弟と自身との三人暮しの家であります。それで此幕でアミーといふ女の性格が現はしてあります。幼にして父を失ひ、浮世を母の手一つに育てられて人となつたアミーには、豫て許嫁の若い畫家がありますので、此女の性格は年よりも優せて、顔も何所となく淋しいところがあり、非常に正直な神経質な、身體の瘦せた而して衣装の好みなども黒みの勝つた極素朴な、一言以ていへば面白味のない、若々しくない婦人である。それで彼女が斯様に自から育たざるを得なかつたのは、畢竟早く父を亡くして小兒の時から彼女及び彼女の弟までも、義務を負擔して世故に老いだからで、弟の十二三許りなまでの早や三十か四十にもなる人のやうな優せた風に出来てゐて、それが滑稽の材料になつて居る。要するに家内中がひねて優せた者の寄合である。と斯様に説明すれば自から了解するゝで、ありまじやうが、此アミーといふ若い女で、作者は先づ言つたら一種のシンボリズムで義務とか道徳とかいふ方面を標象即ちシンボライズして居るのであります。

而して彼女の姪に「ケイト」といふ若い恰度アミーと同年輩位の女を作つて、これはアミーとは直反對に、非常に華やかな活々とした、氣性の面白い、顔も美人で、衣装の色好みなども非常に華美なるものを好む風に出来てゐる、少々は不品行といはれやうが構はない、自分の面白いと思ふ事なら他の毀譽は氣に仕ないでやつて見やうといふ女に出来て居ります。即ち此女を以てアミーが標象する所と反對なる快樂派を、シンボライズさせて居るとも見られ、これは一寸見れば、少し教育のある者には誰にでも直く氣が注ぐやうに、明らかに特色を附けて作つてあります。由來英吉利の社會などで能く申します言に、デユチー、エンド、ブレヂユアー、即ち義務と快樂といふ反對熟語がある。これは本來人間の根本的傾向の矛盾した二方面を表はしたもので、一方には我々が此世に生存して行く必要條件からして、義務といふものを要して來る、即ち我々は必ず如何なる程度までかは自分を犠牲として他人の爲めに働かなければならぬ、即ち義務である。此の經驗は何人も本心に願れば否定することの出来ない心内の事實である。然れども同時にこれと直反對なる、自分のおもしろい事がしたいといふ感情をも我々は持つて居る。これも

亦た偽と否定することの出来ぬ心内の事實であつて、即ち快樂性ともいふべきものである。人間が或は習慣教育の上からして、道徳には従はなければならぬものといふやうに教へられてしまつて、其以上に眼を開いて見ない間は、義務一遍でも満足して行けやうが、一度矛盾した困難事に行當つて、考へ込んで、其所に最う一つ自分の心の底に異つたものゝある事に氣が付て、遂に此二股道に行迷ふ、これは即ち現代に於ける一番深い道徳問題であります。此消息は我邦にても最近の思想界に現はれて就中かのニイチエ論などから此かた、若い人々が如何なる形ちに於いてか、此問題に觸れんとしつゝあることは誰も認める所でありませう。

それで前申した英吉利の熟語デューチ・エンド・プレジユアー即ち義務と快樂の對稱も、此問題を通俗的に諺のやうな形にした句であります。ですから普通の觀客でも此「カズン・ケート」の劇を見れば、すぐ義務と快樂との對照の劇と呑込み得るのであります。

それで又た劇の筋に立戻つて話しますと、序幕はアミーの結婚準備の取込み騒ぎであるとか、または前申したひねた、而して優せた、人々の集つた可笑味であるとか、

又た斯様な人々から見た姪のケートの不品行がましいやうな種々の行ひの噂さであるとかいふやうなことで賑やかに終る。で其幕からしてケートが或る男と汽車の中で邂逅つて、其の男がひどく氣に入つて居るやうだといふやうなことを喚はせて、そしてケートはワース・エンド・ワース(段々悪くなって行く)だといふやうな噂さをして居る。所がケートが邂逅つたといふ男は實はアミーの許嫁の畫家であつて、此畫家が亦た美術家でもあるから、自から極華美すきなケートと氣の合いさうな、そしてアミーとは直反對でありさうな性格に出來て居る。つまり作者は……明らかに自からさう意識して書いたか如何かは知りませんが……此男でもつて快樂又は感情といふやうなものを標象として居るのです。で其快樂感情の代表である男子と、義務の塊又は義務を追求することを一代の務めとするアミーとを配合した。アミーは如上の性質で義務の爲めといふことを居常口に離さない女でありますから……要するに義務の爲めなら何事でも爲る。左様に義務を追求する女に快樂を代表する畫家を配合したのであるから、作者の考へも大體は察し得られます。而して快樂を追求するに専念なるケートが見染めた男

が、アミーの許嫁の畫家であつたため、茲に劇の葛藤が生ずる。次の幕はケートの部屋借りをして居る居室であつて、或る大雷雨の日に再びケートと彼の畫家とが出會つて相伴つてケートの居室に歸つて話をする場である。これは英吉利の軽い滑稽を混せた濡場であります。で結局二人は戀を明し合ふといふことになる。そして終りの幕……三幕目は再びアミーの家になつて、アミーが自身の許嫁の男とケートとの間を聞いて種々に煩悶をする所である。然し其の煩悶の工合が滑稽に出来て居る。即ち先づ普通の人情ならば、兎も角我が許嫁の夫を自分の姪に奪られたのであるから、道德の方ではなくして忿怒嫉妬の感情の方向から來た煩悶でなくてはならぬ。然るにアミーの煩悶は其方ではなく、ケートが夫れ程思ふ男であるなれば、これに譲るのが義務であるが、男に對しては自分とすべきことを誓ひをして居るのであるから、自分から其誓ひを破る事は出来ぬ、といふやうな意味に煩悶する。アミーは心底から其許嫁の夫を慕つては居なかつたかも知れぬが、然しながら戀しない男でも一旦許嫁した以上、それを他に奪られたら普通の人情からいへば快くはない所であるが、此點が滑稽になるところ

で、アミーが普通の人情に反した煩悶は、觀客がこれに同感せずして寧ろ笑ふ形ちになるのであります。尤も細に文藝の標準からいへば、人情を滑稽の犠牲にして同感して泣かすべきところを笑はせて見せて居るのであるから、味の無いものとなる。然し茲では此無理な滑稽が意味のある事になつて居りますので、斯様にしてアミーは煩悶します。然れども結局母とも相談しまして、男に許嫁の夫たるべき誓ひを自分から破るといふことを心配しながらも相談して見ます。即ちケートの願ひを達せしむべく、許嫁たる自分が身を退いて、男にケートと結婚する下心があるか何うかと聞いて見る。すると男の方ではケートに十二分の意が有るのであるから願つたり叶つたりで、寧ろ驚き喜んで、アミーとの破約を承諾する。其所で早速ケートを呼寄せて、畫家とを媒して許嫁する。でアミーの方は前から自分の家に入出入する牧師で、これは職掌が職掌であるだけに、畫家とは直反對に義務道德に心を傾ける淋しい性質で、矢張優せた男に出来て居る。此男と結局母の媒で新たに許嫁になる。で二た組とも目出度目出度で手を引いて食堂に入るといふので幕になる。

以上の筋を一括すると、始めアミーと書家を結び付けたのは義務と快樂と矛盾した二つを結合調和することが出来やうかといふ問題を提出したもので、然るにこれは到底結合が出来ず、遂に快樂は快樂を追求する運命となりアミーは義務の塊の牧師に行くこととなる。結局二つの分れたものになる、二元相並んで行くべきものであるといふ結論に歸するのであります。然れども前に申したアミーの性格が見物には凡て滑稽の材料であるため、其結果は作者自から意識せるか否かは知らず、アミー即ち義務、道德といふ方面を嘲笑して、寧ろ快樂派のケートや書家の方に同感を多く寄せて居るといふことになつて居ります。即ち劇を見終つたる後に全體の調子として観客の頭に殘る感銘は、窮屈らしく道德のそれのみを追ふことは笑ふべく、寧ろ十分の快樂を追うて走るこそ人生の活々したところであらうといふやうな解決の感であります。今一度換言すれば、根本的道德問題に此劇が與ふる解決の感情は快樂派的といふことです。矢張同じやうな問題に觸れて、而も其解決の異つて居る一つの劇は、去年倫敦のガトリック座で演つて居りました「ウォールス・オブ・ゼリコー」即ち「ゼリコーの城壁」と題

するものでありまして、作者はストロトといひ是れも若手で一寸名の知られた人で、大陸のマーテルリンクなどを多く英譯して有名であります。此の劇は番附を失なつたために役の名を忘れましたが、表題の「ゼリコーの城壁」といふ「ゼリコー」は、英吉利にもヘンリー八世の事蹟と關係して人に知られた名であるが、これよりも古くかの舊約全書の第六卷「ジョシユア」の條にある所の、パレスターインのゼリコーといふ街のあの名の方が此作者の用ゐたものであらうと思はれます。たしか舊約全書にある如く「ゼリコー」の城壁は落つべし、といふやうな句が劇の中にも嗅はせてあつたと記憶する。即ち「イスラエル」人が埃及に四十年の流浪の後歸つて來て取つた一つの都會であるといふやうな意味から取つたのではなかつたかと思ふ。それで筋は或る英吉利人が彼の國で能くある如く、徒手で殖民地の濠洲に渡つて、幾十年の間稼き働いて遂に鉅萬の富をなして、これから一つ本國倫敦に歸つて其所の楽しい社會に自分の殘生を送らうといふので歸つて來た。所が倫敦で交際社會に巾を利かせるには財産と同時に今一つ便利なものは身分又は爵位であるが、哀哉、此男は成上りの俄分限者であるからして、金はあるが身分

や爵位はない、それで身分を得たいと搜して、漸く或る貴族の未亡人と結婚をしまして、そして身分もあり金もあるといふ申分のない體になつて、西倫敦の真中に飛込んだのであります。西倫敦といへば前にも他の所に書いたことがありましたが、英吉利の富貴權勢榮華の中心でありまして、西倫敦の交際社會に巾を利かすのは豪勢な事である。ところが其様な社會であるだけに、上流社會の裏面の腐敗も劇しいと見える。で此上流社會の裏面の有様を一方には此劇中に曝露してありまして、それに打撃を加へたものともいはれる、ですから或る人などは此劇を見て、ア、ツタック、オン、ゼ、ウエスト、エンド、ライフ即ち西倫敦攻撃と呼んでゐる位のものであります。

で、此劇の幕は先づ其貴族の未亡人たる妻君の驕奢の有様で開きまして、此妻君が西倫敦の腐敗を代表した婦人に出來て居て、夫はあれども無きが如く、家庭の内は大亂脈、唯金の有るに任せて晝夜を分たす客を招き、酒池肉林の豪華を衒ひ、煙草も吸へば酒も飲む、腐敗した貴婦人の多くを集めては徹夜骨牌を弄び、賭博を争ひ、舞踏會は毎晩のやうに開かれる、夫は其方除けにして、若い男と手を組んで躍り狂つ

て夜を明かし、あらん限りの歡樂に溺れ、快樂を盡す状態を見せる。であるから、これから楽しい人生を味ふつもりであつた夫は、愕いて失望し、豫期と反した不愉快な生活の裡に快々として煩悶する。かくて夫は如何にして此不愉快な生活から脱れ得、如何にして妻君を諭してこれを家庭的のものにしやうかと、時々妻君に種々訓誡して見るが寸毫も其益なく、結局女は夫の訓誡に對して、私の結婚は金故の結婚である、自分は快樂の爲めに結婚したのであるとまで放言するに到つた。で夫は妻君の此言に對して、それでは道德といふものが亡くなつて了ふことになるではないかといふと、妻は決して不道德な行爲はしないが、然し快樂は自分の本領である故、これを廢する譯にはゆかぬといふ。で此落想からいへば……作者が意識して書いたものか、奈何かは別問題として……結果からいへば此の女を以て快樂を代索させ、それで行き方は前のカズンケットと異つて我々が快樂一點張りやつていつたら那邊までいけやうかといふことを示して、而して其結果到底人生は快樂一點張では維持が出來ぬ、當然の結果として不道德に陥る。換言すれば道德に觸れずして快樂を追求することは出來ないといふことを示して居る。けれど

もそれが此劇の最後の解決ではなく、其解決は更にそれより後にある。妻君は自墮落である。自分一人は快樂のためにやると思つても、四圍が然うは爲せず、何時も相伴に舞踏の對手となる若い男があつて、これが特に妻君の氣に入り、で常に此男と酒を酌み、音楽を奏しなどして、特別に親しくして居るために、妻君の方からは別に然る心は無く、唯これを快樂の道具として居るのであるが、男の方はやがて妻君を戀することになつた。で妻君に向つて道ならぬ戀を仕かける。ところが妻君は腐敗はして居るが元來惡人ではない、それ故まさかには姦通といふ罪惡を犯すといふことはなし得ない性格である。一步すれば姦通といふ大なる罪惡になるといふことも、快樂のためといふ……換言すれば情を弄んで其若い男を弄んで、而も不道德に踏込まない範圍といふ自分に對しての申譯で満足して居やうとする。ですから男から戀を持かけられた時には、愕いて茶化すやうな避けるやうな態度であしらつて居る。これは中の幕であります。妻君の妹なども心配して深入してはならぬと妻君に注意すると、妻君はオンリー、フョリア、マイ、プレジューア即ち只自分の快樂の爲めであるといつて取合はない。然

るに若い男の方では弄ばれて茶化されて満足する譯にはいかぬ。一夜かの妻君の夫の不在を窺ひ、妻君を訪れて遂に接吻を迫る。妻君は愕き避けて脱け廻る。男はこれを追ひ回るといふ騒ぎで、結局妻君を捉へて抱きすくめ不義の接吻をする。妻君は驚愕のあまりに、卒倒する。其刹那に夫は外から歸る。劇は一大破裂に達する。若い男は身を躲す。夫は其場の様子で事情を察し、妻を介抱して種々これを責めもし、慨きもする。そして結局不義の女であるから改悛することのない以上は、共に添つて居る譯にはいかぬから別れやう。それとも全然思ひ直すならば、自分と共に深淵に往けといふ、これが終りの幕である。

そして種々夫の言ふ事があるが中に、自分は四十年深淵のワイルド、ネーチュア(荒漠たる自然)と闘つて、そしてこれから快樂をと思つて故國に戻つて見れば萬事は豫期と違つて眞の快樂は茲に無いことを發見した。矢張眞の快樂は深淵の自然の懷にある。これから亦た彼所に歸つて快樂を求めらるから一緒に來いといふ。所が妻君は西倫敦の腐敗した空氣が骨身に染み込んで、此快樂の味が忘れられないから、愈々此破裂の場合に達したにも關らず、尙快樂に執着して居て、夫の言に従ふ

ことは出来ぬと拒む。然るに二人の間には小兒がある。これが鍵になつて、夫にそれならば自分は一人で小兒を伴れて濠洲に歸るといはれて、此時始めて親子の愛情を胸に點せられたので、流石に小兒を手離すことが出来ず、快樂の慾を抑へて妻君自身も夫と小兒と三人一緒に濠洲に行かうと改悔の詞を述べる。それで夫も安心して清い接吻をして、従來の腐敗せる生活を一洗して、再び荒蕪たる自然の濠洲に赴くといふので幕になるのであります。

それで此劇の結論は、快樂一本筋でいけば人生は不道德の範圍に飛び込む、道德と衝突する、妻君は即ちそれを證して居る。人生に於ける眞の快樂は、道德と調和し得る範圍でなければならぬ。即ち文明的でない濠洲の生活といふやうなことが、一層容易にこれを成し遂げることが出来るのである。西倫敦的生活には道德と矛盾しない快樂は存在して居ないといふことを表はして居る。

即ち前の「カズン・ケート」が、快樂と道德との矛盾及び道德に對する嘲笑を結論とするに對して、此劇は道德と快樂との調和の道を自然の中に示さうとした、それが即ち此劇の與へる解決であるのでしやう。

好一對の對稱とは即ち此意味であります。これに依つて一方には歐羅巴現時の思想界の状態をも窺ふことが出来ましやうと思ひます。(明治三十九年談話筆記)

ピネロ作「一度目のタンカレー夫人」

(上)

丁度イブセンの死んだ後であるから、イブセンの勢力威化の如何に歐洲文藝壇に大であつたかといふ一例ともならうと信じて、茲に英吉利脚本作者の最高位を占めて居るピネロのことを話して見る。

前にも二三度言つたかと記憶するが、現在の劇作者の中ではフキリツプスとか、パリーとかいふやうな人々は別として、今少し格の古い人で、最近こそは餘り振はないが、兎も角も斯界の頂點に達して今尙劇作者の首席を占めて居る人は、即ち眞面目なものでピネロ、喜劇でアーサー・ジョーンスの二人であらうと思ふ。ピネロも以前は矢張り英吉利在來の喜劇作者であつたが、中頃から眞面目な社會悲劇ともいふべきものゝ範圍に入つて、一轉化をしたのである。丁度其回轉期に入つたのは、今から十五六年前であつて、即ち此回轉期に入つたことが、一方からいふとい

ブセン風の劇を作り始めたとの事である。就中一八九三年に出した「二度目のタンカレー夫人」一八九五年に出した「エブスミス夫人」などいふ作が尤も明白に此回轉期を示したものであつて、同時に此等の作がピネロの最傑作と目されて居る。即ち此等の作は殆んど英吉利の劇壇其ものゝ、近時の回轉期を代表して居るとも見られる。いはゞ英吉利の劇史に重大の關係を有して居る作であるからして、下に先づ「二度目のタンカレー夫人」の梗概を稍詳しく話して見やう。記者自からは丁度兩三年前倫敦で昔初興行の當時之を演つた名女優カンベル夫人といふのが、久し振りで倫敦のニユウ・シヤターで之れを復興したのを見たから、今これを原作によつて話さうと思ふ。

此劇の倫敦で復興した時は丁度カンベル夫人が同じく倫敦での名優の一人なるマーチン・ハーヴェーと一座して、かの獨逸のゾーダーマンが近作の一つたる「エス・レーベ・ダス・レーベン」を「生の喜び」と英譯して演つて、大喝采を博した直ぐ其後であつた。而して此「生の喜び」の女主人公乃至今話さんとする「二度目のタンカレー夫人」の女主人公の如き役が、尤も此女優には適して居るのであつて、其ゾーダーマン

の作は矢張イブセン張の者であつた。さればキャンベル夫人が好んでビネロのものなぞを演ずるのは、一方からいへば此女優が近代劇のイブセン的傾向に尤も適應して居るのかと思はれる。

筋に入る前に先づビネロの傳をざつと話すと、渠は一八五五年の生れで、全名はアイサーウキングビネロである。而して其ビネロといふ名字が示して居る如く、祖先は英人ではないらしい、葡萄牙人の系統だといふことである。始めは法律を學んだが之れを好まずして、十九歳の時初めて俳優になつて蘇格蘭エヂンバラのウキングム一座に加はつた。後にはリヴァプール邊から倫敦に來て、其所で始めてかのアーヴキングの一座に加はつて、有名なライシヤム座で種々の役を勤めたが、勿論俳優としては重要な位地には上り得なかつた。バーミンガムで沙翁劇の「ムレット」の中の王を勤めた時には空前な不出來な王といふ評判を取つた。其他アーヴキング一座では例へば、ヴェニス商人の中のサラリノの役を勤め、其法廷の場で三十五分間も何も言はないで立たせられるなどは随分苦しい役だと頻りにこぼして居たといふ話である。然るに一八七七年渠は二十三歳の頃始めて

作者としての生活を始めた。勿論俳優としての傍に書いたのではあるが、其初めての作は「一年二百ポンド」と題する作であつて、それは倫敦の世界座のために書いたのである。これは極く短いものであるが、また其年にライシヤム座のために「其勝負は二人でやれる」と題する短いものを書き、一二年経つて後、またアーヴキングの勸めで、同座のために「デージーの逃れ」「ヘスターの秘密」「過ぎし事」といふ短篇を作つた。而してこれには多くビネロ自から一役を勤めて居た。然るに其同じ頃一八八〇年にセント・ゼーラムス座の名女優ケンドール夫人のために「福蜘蛛」(マネースピナー)と題する劇を作つた。これが劇作者としての彼の位地を得た第一歩であつた。而して此作は當時一つは名優の技倆にも由つたであらうが兎も角も成功した作として評判が好かつた。而し作風に於ては、極くコンヴェンショナルな在來の英國式の喜劇の範圍を脱しないものである。但しこれに付て或る批評家はビネロが後年回轉期に達すべき資質は既に此作に現はれて居たのであるが、只當時作者に其新方面に大膽に直進する勇氣が缺けて居たのであると評した。それで其の評の仕方がおもしろいと思ふから茲に掲げて見やう。曰く此の「福蜘蛛

蛛の筋に付いて作者の根本の思想は、茲に若い夫婦があつて、其夫には死んだと思つた先妻がある、それが意外にも尙生きて居た爲に葛藤を生ずるといふのであるから、斯様な場合に我々は如何に處すべきかといふ問題が生ずる。如何にも解せられぬ複雑な人生問題に觸れかけて居るのである。されば若し作者に勇氣さへあれば、此所から出立して深い意味のある人生の底を痛切に攪き起こすことが出来るにも拘はらず、此作者は當時此大膽なる事業を敢てする勇氣がなかつたと見えて、平凡な在來の米國喜劇の型で、此第一場に現はれた非常の地位をば解釋し去つて了つた。それは即ち調和といふことであつた。結局疑は解けて結末は目出度く終るといふことであつて、即ち喜劇になつた所以である。而して此風は此の作者に尙暫らくの間續いて、後の「墮落者」乃至「二度目のタンカレー夫人」に到つて始めて此上に頭を擡げたのである云々。勿論今でも英國喜劇の佳いものには頗る味ふべき人生の眞味も籠つて居て立派なものがある。古くはシエリダンの或るものより、下つて現代に及んではアーサー・ジョーシスの或る種の作例へば「虚言者」などの如きは、一種別様の妙味を有して居るものと信ずる。而し多數の喜劇は、や

ゝもすると俗趣味に投するだけの極くつまらないものになる。其一番主となる理由は元來世の多數衆俗といふものは、一日頭や身體の疲れる仕事をして、夜分にも劇場に行つて笑つて一日の勞を息めやうといふのであるから、好んで肩の凝るやうな藝術を味ふことなどは出来ない、是れが現時の大都會の形勢であらう。さればこれらの多數を對手にする喜劇は、勢ひ餘り沈痛なものや、深刻な悲劇は不適當になつて來る。倫敦はじめ巴里伯林の劇壇に近年所謂音樂的喜劇といふものが盛んに入つて眞面目の悲劇の範圍を蠶食し墮落せしめて行くと、一部の人の慨歎するものも即ちこれらの事實から生じた現象である。かの大陸でイブセンの「人形の家」の結末を今少し調和的に緩和して、ノラが家出を思ひ止まるといふ事にして、以て俗人の趣味に投じやうとしたといふ話。または倫敦でキツプリングの小説「失明」を劇にした時に、其結末のあまりに悲惨なのは、倫敦の多くの人の快しとする所にあらずといふ趣意からか、其結末を目出度いやうに書き替へたなどは既に心あるものゝ批難を蒙つたことで皆上に言つたと同じ事實を證明するものである。要するに喜劇を喜ぶといふことは、やゝもすれば人生の底に潜んで居る

悲惨の流れに觸れることを嫌つて、表面の調和とか、平和光明とかいふ事に止つて居やうとする一種の通俗な考へから來る恐れがある。上に言つたビネロの初期の例が即ちこれらの一例と見られないでもない。一八七〇—八〇年頃英吉利の劇壇を支配して居つたコンヴェンションリズムの喜劇的嗜好はビネロをして「福蜘蛛」の如き材料にすら、強て光明的の結末を附するの止むを得ざるに到らしめた。それは成程實際世界に於て殊に英吉利の如き道德の進んだ社會に於てこそかやうな事件の多くは立派な紳士の心、寛大な性質からして、忍ぶべきを忍び以て其事を無事圓滿に結局せしむるかも知れないが、其無事な結局を強て避け、本然の人性の到る處を極めて、其所に普通道德以上の深い眞理の輝き出づるのを認めんとするものも、一つの事業でなくてはならぬ。イブセン等が文藝の光でもつて照し出さんとしたものは、即ち此底の暗いところに横つて居る眞理である。死んだアーヴキング次での英吉利の名優たるウキンダムスが、好んで演ずる喜劇、若くは喜悲劇ともいふべき「デーヴキット・ガリーリック」または「ローズ・メレー」などの如きは、即ちこれと反對の側に立つて立派な紳士、寛大な心の人物が忍ぶべからざる本性の要求

をじつと耐へて、此世を平穩無事に治め行かうとする、其忍耐の刹那に生ずる淋しい悲哀を描き出したもので、これはまたイブセン式な著作と方向こそ反對なれ、人間の本性の底から閃き出づる美しい火花の一片で、ある點に於ては、選ぶところはないのである。英國喜劇の上乗なるもの、妙所は、多く此點に存するといつてよろしい。さてビネロは「福蜘蛛」の後、一八九三年に「二度目のタンカレー夫人」を出すまでの間、二十四篇の作を有し、又其以後最近までに七八篇の作を出して居るが、例へば一八七一年に書いた「郷土」、一八九〇年に出た「復興」、女校長「ダンデキー・デキック」、「スウキート・ラヴェンダー」、「墮落者」、「内閣大臣」、「アマゾンズ」などが、「二度目のタンカレー夫人」以前に出た重なるものである。批評家に依つては、これらの中で「墮落者」と「二度目のタンカレー夫人」とを男女が過去に於て身に帯びた汚點の如何に執拗く一代に崇るかを示したものと見る。而してイブセンの男女觀の尤も明らかに渠に影響を及ぼしたのは、寧ろ之れに次いで、の作即ち一八九五年に出た「エブスミス夫人」及び「疑の利」の二作だとする。就中其「エブスミス夫人」中の所々には、明かにイブセンの「ブランド」を想起させる所すらあるといふ。而して此二作は寧ろ男女の

兩性が相合せんとする時に、其間如何に複雑なる困難の起り來るかを示し、兩性問題に筆を着けたものであると稱せられる。而してイブセン其人が眞に英吉利に承認せられたのも、丁度一八九五年頃であるといふ。然れどもこゝでは、要するにこれらの四作に通じて深い人生問題が提出せられて居るものと、我々は解釋したい。最近の作では一九〇一年の「アイリス」、一九〇四年の「レテキー」などが、人の記憶に新たなるところであつて、「レテキー」はこれまた記者が倫敦に居る間に初興行をやつた作である。

二度目のタンカレー夫人

第一場は、富豪オーブレイ・タンカレーの部屋、オーブレイは四十二歳の立派な紳士で、今丁度友人三四人と晚餐を共にした後の態。此オーブレイはこれより先き、妻を失つて今は鯨生活であるが、今しも彼れは舊友と種々懷舊談などして遂に自分の身の上に及び、突然に、實は自分は明日を以て結婚しやうと思ふと告げる。一同はこれを聞いて其意外な話しに愕いて、奈何いふ理由で奈何な婦人と結婚するのかと訝り問ふ。然れどもオーブレイは時の經つ間には解るからさう追窮してくれ

るなといふ。而して今夜諸君を招いたのは、結婚がやゝもすれば朋友との交際を冷淡にする世の慣はしであるから、自分と諸君との厚誼も、これから奈何なるか解らない、今夜はいはい今までの交りの最後の一節として、諸君を招いたのである。明日からは自分の生活は新たに其第一節をば開いて行くのであるから、今夜は何卒心置きなく話してくれといひ、而して自分の結婚は普通の社會を満足させるやうな舊式の結婚とは何程か差つて居るから、其積りで居てくれなど話して居る。所へ一人特別に親しい處のドランムルといふ友人が遅刻してやつて來る。そして自分遅刻の申譯けをして、其申譯の理由からして漸次、或る友人が新たに結婚した話に及び、其友人の妻になつた婦人はメーブル・ハービーといふ女であるが知つて居るかといふ。これを聞いた人々も愕いて、メーブル・ハービーといふ婦人は女優であつて、随分道徳上にも批難のある婦人である。それとあの男が結婚するとは意外の事だ、あれ程男を替へたり、離婚沙汰なぞにたづさはつて居る婦人に關はつて居るとは、紳士の耻辱であると議論してゐる。其間主人のオーブレイは手紙を書いて居りながら、これらの話を耳にして激したやうな調子で居る。一方では新

結婚者の話がだん／＼進んで行つて、議論に花が咲く。其結婚した男も不憫な事には精神的に死んで行つて、遂に埋没し去つて了ふ。社會には一つの死海といふものがあつて、人間も其淵に足をかけては駄目だなどいふ。オーブレイは遂に其席に堪へかねて、一寸失禮すると言つて別の部屋に行つて手紙を書きつゞける。後はドラムムルと他の三人の友人のみとなつて、オーブレイの身の上の噂に移る。奈何いふ婦人と、奈何いふ結婚をする積りだらうと頻りに訝つて、オーブレイも四十二歳といへば實に危険な年であるといふやうな事から、結局ドラムムル一人が後に居残つて篤と主人の秘密を聞き出すから他の客人は一足さきに歸れといふことになる。而して尙オーブレイの過去の噂に移つて、渠の先妻は非常な舊教の信者であつて、美人ではあつたが而し非常に寂しい静かな冷いやうな夫人であつた。従つてオーブレイは一生其婦人とは十分打解けることが出来なかつたやうである。夫人の方でもまた到底オーブレイは、自分ほど嚴肅な信仰を有つことは出来ないものと嫌めて居たものらしい。で二人の間に一人の女の子が出来たが、其子は母の主張で、斯様な父の傍に置ては可かぬと、尼寺に入れて清い生活

をさせる事になつた。オーブレイは種々反對して見たが、遂に妻君は頑として聞入れなかつた。其間に妻君は死んで了つたから、其所で早速オーブレイは尼寺から自分の娘を伴れ歸らうとしたが、意外にも女は母の氣象を受けて、自分は清い此寺から俗世間に歸るのは嫌だといつて、父の勧めを聞入れなかつた。といふやうなことを話して、丁度先日オーブレイが女を迎ひに行つたのは、君等も知つて居るだらう、今は其女は十九であるが、可哀さうなものである。といつて居るところへオーブレイも手紙を書き終へて入つて來て、また暫らく雑談に耽つて三人の友人は立ち歸る。

後は親友のドラムムルとオーブレイと二人になつて、ドラムムルはオーブレイに種々の事を聞糺し始める。オーブレイも遂に隠し切れず、實は明日結婚しやうとする婦人はジャーマン夫人であるといふと、ドラムムルは非常に愕く。蓋しドラムムルは此婦人を知つて居るのであつて、今こそジャーマン夫人と名告つて居るが、昔はダアドリー夫人と名告つて居た時代もあるし、其他二三の男と同一に棲んで居たこともあつて、最後にジャーマン夫人となつたのすらも、實は正當な夫婦で

はないのである。ドラムムルも種々な席で種々な場合に此婦人と逢つて、能く夫人の素性を知つて居る。然るに今オーブレイがかやうな婦人と結婚するのは非常の誤りであると信ずるから、これを諫止しやうとする、此婦人の本名はパウラレといふ矢張女優のやうな経歴を有つたものである。そこでオーブレイがいふには、君は彼の婦人を賤しいものゝやうにいふけれども、其経歴に同感して見れば憫れむべきである、成程種々の男にも關係はしたらうが、それらの場合に於て全く罪人か悪人かのやうに取扱はれて、其本性の美しく立派な方面は、それが爲めに隠されて了つたのである。普通の平凡道德の眼から見ればこそ、不道德のものともいはれやうが、少し高い見識から見れば寧ろ憫れむべきもので、畢竟狭い社會から虐待せられて居るものである。自分は其立派なところを認めて、彼女と結婚しやうと思ふのである。といふと、ドラムムルはそれでは君は平凡世界の道德の批難は調はぬといふのであるかといふ。オーブレイはこれに答へてさうである、自分は靴を磨く代りに、自分の蹠を厚くして寧ろ自分の本性を尊び、偽善的な道德をば振り棄てる。といふやうな趣意の激烈な意見を吐く。それで如何なる事

情があるとも真情を以て愛し、また此婦人の中に眞の美を認めて居るから結婚して眞實の美を證據立てやうと思ふといふと、ドラムムルもそれでは今夜は訣れるが、今後君と再び逢ふ時は、此結婚が立派であつた事を見せて貰いたいといつて歸らうとする所へ、取次ぎの男が入つて来て、今門口にジャーマン夫人が見えまじたといふ。時刻は夜の十一時過ぎであるので、オーブレイは友人に對し極まりを悪がるといふ事なぞあつて、やがてドラムムルは自分は只人生の見物人であるから、人々が奈何な運命に成行くかと見てゐるのである。願くばそれが幸福な結局であるやうにと思ふ。決して何の主意も抱いては居ないから、君の將來をも美しいものにしてくれと、別れて行く。引違へてパウラが入つて来る。種々相愛して居る男女の挨拶などあつて、パウラが昨夜の夢の話しを仕出し、其夢見の末が甚はだ良くなかつたから、自分は直様オーブレイに見せやうと思つて、思ふ通りを手紙に書きつけた、其手紙を持つて来たから、後で讀んでくれと手紙を渡す。話しが漸次シンミリして来て、お前さまも曾て妾からも聞いた通り、また他人からも聞かれたであらう通りに、妾の過去には随分種々な事があつて、どうせそんな風に汚れた身體

であるから、妾がお前さまを慕ふことが強ければ強い程、妾のためにお前さままで墮落させるに忍びない。妾は死ぬほどお前さまを慕つて居るが、萬一お前さまの心に不安の念があるなら、今の間にそれを奇麗にいつて貰ひたい。明日結婚してからでは仕方がないから、切れるなら今の間に切れて了はふといふ。男は種々これを宥めすかして萬一お前と私と縁を切るなら、お前は奈何するつもりだといふと、パウラは、さうなれば妾は自分で死ぬまでのことであるといふ。男は決して見棄てるなぞといふことはないから安心しろと、再び男女は熱烈な愛情を確かめる。丁度其所へ手紙を取次ぎの者が持つて来る。開けて見ると、それは先達て逢つた娘が尼寺から遣したもので、女の名はエリンといふ。其の文句の趣意は、自分で種々考へて見たところ、一旦はあゝいつたが矢張り父の傍を離れて居るも本意でない、傍に居つて其寂寥を慰めるのが、天に居る母の意にも叶ふであろうから、妾は父上の傍に歸つて行きたい、呼んでくれといふのである。パウラは其手紙には意を留めず、遅くなるからといふので衣裳を着替へなどして、馬車で自分の宅へ歸つて行く。オーブレイはそれを送り出す。明日こそは我幸福の日よ、といつて相談

れる。それが第一場の終りである。

(下)

第二及三幕で富豪オーブレイが妻のパウラ及先妻の娘エリンと共に田舎に邸宅を構へて、其所で後妻パウラの過去の汚れを洗ひ淨めてやつて清き新家庭を作らんとした其結果が豫期豫想通りに往かないで、パウラが身の汚れが機に觸れ折に觸れては夫妻の間を妨げる因由となつて風波が絶えない、丁度其間に、女エリンの新に意中の人として同道して歸つた男アーデルが舞臺に現はれて来て、それが昔パウラの關係して居た男であつたゆゑに、漸と纏りかけんとした家庭も再び混亂の狀に陥るところまで来る。(此二幕都合により略す)

一體此作は、舞臺で非常に成功した作だけに、全體の組織が社會劇として遺憾なく戲曲的に出來て居る。波瀾は波瀾を生み、葛藤は葛藤を生じ、毎齣殆んど息も吐かれぬ程氣合ひの合つた劇だ。それが第三幕の終りで右に言つた如く危険の形勢にまで高つて來たのであるから、次に第四齣の大破裂の場は自ら想像せられる譯

であるが場所も矢張同じ家の同じ室で、若きアーデルが必ず自分との關係をば匿してくれよと死を以てパウラに迫つて置いて出で去つて後、パウラは獨り其部屋に取殘されて我ともなく其所に落ちて居た鏡を取上げて我顔を寫し見て茫然として居る。其儘の形ちで第四齣の幕を開くのである。

さて幕が開くと、先刻玉突部屋に出で行つたオーレード夫人が入つて来て例の通り種々卑しい身振り言葉で、何故玉突きに來なかつたか奈何して居るのかとの問答がある。最早茲所ではパウラは殆んど煩悶に煩悶を重ねて意地も張りも挫けかけて居る所であるから優しく言葉をかけて、折角來てくれた貴方達に對して主人振りが行届かず不満足を與へたのは何卒恕してくれられるやうになどと言つて居る。所へ續てオーレード夫人の夫も入つて来て例の通り愚圖の本性を出して滑稽の事を言ふ。これをオーレード夫人が引立つて無理矢理に寢室に伴れて行く。それと引違ひにオーブリーの友人ドラムルが入つて来て、エリオンが急に歸つて來たといふ事を聞て、それは何故かと愕くと、パウラは其理由を語るには自分は今餘りに疲れ過ぎて居るため、これを語るのが厭であるから、丁度今其件で隣

家に往つた夫のオーブリーが直きに戻るであらうから、それから委細を聞てくれといふドラムルは、それでは其事は然うとして置いて、私は明日の朝は此地を出立するから、茲所で貴女にお別れをして住かう、兎に角貴女と夫との間が再び以前のやうになるのを祈ると別を叙して出て行くと、これと入れ替つて夫のオーブリーが歸つて來る。渠は勿論エリオンの情人アーデルの先刻茲所へ來たのは知らないのであるから大喜びで入つて来て、今コーテリオン未亡人に聞て見ると、アーデルといふのは中分の無い人物で、軍人として印度に勇名を轟かした立派な若者である。お前も定めてエリオンからも聞たであらうが、此獅子の如き勇悍な聲をエリオンが目つけたのは非常な手柄であると、頗る勢込んで述べる、それで私も其男に逢つて見やうと思つたが折悪しく不在であつた。然し聲としては私には更に異存はないが、お前の意見は奈何かと聞く。パウラは暫時言ひ淀んで居たが思ひ切つて、無論異論はないけれども、第一に言はなければならぬのは、私は既にアーデルさんにお目にかゝつたことがあると言ひ放す。オーブリーは愕然として「あのアーデル大尉にか。」パウラ「アーデル大尉に」と答へる。そして、丁度貴方が不

在の間に其處の庭を突切つてエリーオンに逢ふために來た、それで私は逢つたのであるといふ、オーブレイは顔を顰めたが、唯それだけなら宜いといふ様子で、結局其人柄は奈何かと問ふ。パウラは屹と決心の態で話を昔に戻して、丁度私が結婚をする前の晩に夢見が悪いと言つたのを、貴方は覺えて居らつしやるか、其時私が貴方に手紙を渡して、其手紙には私の身の上を書いて置た、而し其時貴方は其手紙を見るに及ばぬとて焼き棄てられた、それを今も覺えて居らつしやるか、覺えて居らつしやれば、あの手紙の中にはアーデル大尉の名も載つて居た筈です、と聞てオーブレイは再び吃驚して、パウラの傍を離れて沈と向つてパウラの顔を見詰める、而して全體其アーデルの名の載つて居たといふのは如何いふ譯かと聞く。パウラは答へて、然うです、アーデルと私は一時一緒に居ましたといふ。オーブレイは一言も發せず、目瞬きもせず、パウラを見詰めるばかり。パウラは尙も夫に向つて、斯様に打明けけた以上、さア貴方は此顔を打つても尙足りないと思はれやうが、請ぞ打つて下さい。私は今は奈何貴方にされやうとも厭はないといふ。オーブレイは漸く我に返つた體で更に、先刻お前はアーデルに逢つて如何したか

と問ふ。パウラは結局私はアーデルに對して此事を貴方に打明けやうといつた。然しアーデルはそれを望まなかつた、是非此事を匿してくれといつた、とこゝまでいふ間感情は層々激越した體で、彼女は遂に堪へ得ずして泣伏しながら、請か暫時貴方は彼方へ往つて居て下さい、私は此座に堪へる事が出來ないといふ。オーブレイは尙傍を去らずして問ふ、其間娘のエリーオンは如何して居たか。パウラは答へて、それは部屋の外に立去らして置たから、事の顛末は知らぬ。大丈夫であるといふ。所へ取次人が手紙を持つて入つて來る。それはアーデルからパウラに宛た手紙である。でそれを夫妻して讀んで見ると、書中の文句は、自分はこれから直様巴里に立歸つて返事を待つて居るから、事の成行きを知らしてくれ、そして請か何分ともに事を圓滿に取計つてくれとの趣意である。讀み終つて二人は互に顔見合せて溜息を吐たが、萬事は是れまでであるとオーブレイは其手紙を扯き棄る。パウラは其扯き棄られた手紙を拾ひ集めて、此手紙は請か此儘焼てくれとオーブレイに渡す。

其所へ娘のエリーオンが入つて來る。夫妻はぎよつとして振り向くと、娘も一寸お

どくした様子で、何事か起つたのですかと聞き問ふ。茲に於てパウラは最早席に得堪へずして此室を出て行つて了ふ。エリオンは其舉動に不審して、父に向つて、パウラはアーデルの上にて何かいつたかと聞く。父は曖昧な返事をする。エリオンはアーデルの今夜茲所に忍んで來た事に付て父が不興を抱て居るのではないかと思ひ煩つて、其の事を辯護して、明日の朝になればアーデルも悔悟するであらうから、今夜茲所に來た事は何卒赦してやつてくれといふ。オーブレンは思ひ定めて、娘の名を呼びかけて、エリオン、お前は最早あの男と相見る事はならないと言ひ終つて、覺えず後方にたじろいたが、また氣を取直して宥めるやうに女の手を執る。女は其執られた手を振放して愕きの餘り、それは奈何した事かと迫り問ふ。オーブレンは暫時返答に考へあくんで居たが遂に、實はアーデル大尉の身上に關して少し聞き及んだ事があるから、お前とあの男との關係は是非ともこれ限りにして貰はなければならぬといふ。女は尙も父の自分の傍に寄つて來るのを避けながら、嫌です、嫌です、私に何の心變りもない以上は、あのコーテリオン夫人だつて一處に居たのであるから、別にアーデルさんの讒訴をする譯はな

し、奈何あつても理由なく父の命に従ふ譯にはいかぬといひ切る。そして、何卒其理由を聞かして下さいと迫る。父は尙も賺して其理由は聞かない方がお前の利益であるから、自分の胸の苦しさを察して斷念してくれといふ。エリオンは、それでは明日の朝アーデルに逢つて疑點を當人に辯護さしてくれといふ。父はこれに對して併しアーデル大尉は最早茲所には來ないといふ、そして結局それは自分が間接に差止めたのであるといふ。エリオンはそれを聞て、それでは屹度それはパウラから讒訴を聞たに違ひない、先刻の話に由ると、パウラは倫敦でアーデルに逢つた事があるといつたが、それは屹度そうであらう。オーブレンはそれを制し止めて、左様に輕率な判斷をするものでない、兎に角アーデルの事は思ひ切つてくれ、そしてお前は此場合信じて居る宗教から精神の慰めを得てくれなければならぬ。エリオンはこれを拒んでいふ、屹度父上はアーデル大尉が未だ血氣定らない頃の事をパウラから聞て、それでアーデルを批難されるのであらうが、其事ならば私も疾くに聞て居る、アーデルは正直に男らしく過去を白狀して、男の生涯といふものは皆一度は斯様なものであると説明してくれた。と話しつ

いけるのを聞たオーブレイは思はず溜息を吐たが、エリオンはそれには心付かず、言を進めて、それだけの範圍ならばアーデルの過去の不品行を恕して相愛したのであるから、一向それは咎め立てをするには及ばないといふ。オーブレイは歎息して、お前が先頃此家を出立する時までは清淨無垢の婦人であつたが、お前も遂に所謂浮世の塵が着物の袖に泌むといふ身の上になつて了つたか、男の生涯といふ一句がお前にも解るやうになつたか、凡ての世の罪惡から離してお前を育てやうといふ私の願ひも今は全く破れた、残念な事であるといふ。エリオンはそれを聞て、それは父上の無理である、人間は生れながらにして善惡二つながらに觸れて判断する本能を持って居るのであるから、それから離して置かうといふのは出来ないこととせうといふ。此邊が一種の哲學に入つて居る處である。オーブレイはエリオンの言に次で、それは兎に角必ずお前はアーデルとの關係を絶てと言ひ切つて此室を出で行かうとすると、エリオンはこれを引止めて、私は決心して思ひ切らないと定めたといふ。オーブレイは覺えず娘の顔を見て、矢張お前は死んだ妻の子である、母の氣性其儘が今こそ現はれたといひ、尙語を次で、然し今夜は私

も何を言つて居るか解らない程思ひ亂れて居るから、凡ては明日の朝の事といつて、室を出て行く。

舞臺面は更に變つて、エリオンが獨り取残されたまゝ、偶と耳を傾けると、窓の外に人の氣合がするので、立ち上つて見ると、庇の下にパウラが居る。でエリオンはパウラを此室に呼び入れる。パウラの顔は眞蒼で髪も稍亂れて居る。エリオンはアーデルを思ひ切らねばならぬといふ父の命令は無論パウラの讒訴からだと思ひ込んで居るから、心に憤りを含んで、今までの父との話も其所で立聞きをしたのであらうと詰る、そして何故私とアーデルとの情交を斯様な慘酷の事をして裂いて下さつたか、アーデルの身の上といふものも恐らく人の口の端を信じて取次だけとせう、それならば奈何して貴方は其通り違ひないといふ保證を附けますか、それとも貴方自身で……といひかけて、不圖エリオンは言を切つて、覺えず眼を据ゑてパウラの顔を睨みつけた儘、二た足三足我ともなく後方に退いて、パウラ！と愕きの一言を發する。蓋し偶と思ひ及んで、此の時はじめてパウラ自らがアーデルと關係したのであらうかと推察をしたのである。彼の女は、オー、と

愕きの叫びを残したまゝ部屋を出て去らうとする。パウラはエリーンの今の言に得堪へず出で去るエリーンの腰の邊りに手をかけて引戻す、そして今の言は何を理由にして言つたかと聞くと、エリーンはそれは貴方の顔に見えて居るといふ。パウラは見脈を變へて、ではお前は私が其様不埒な人間だといふのかと息迫しく問ひ詰める。エリーンは「最う何でも宜いから其所を離して下さい、パウラ、いや離さぬ、返答をおし、お前は私を嫌つて居た、其性根を除けて話してくれ」といつて、こづき廻す。エリーンは聲を立つて、奈何するのです。パウラは繰返して「常時もお前は私を嫌つて居た、さア返答をしなさい。」エリーンは宜うござんす答へましやう、私は必定貴方が如何な人物であるといふのを知つて居ました。パウラ、ふむ、誰がお前に其様な事を言つた。エリーンは「誰でもない、貴方自身で、私は初めて貴方を一見見た時から、決して貴方が立派な婦人ではない事を知つて居ました、それが理由で私は如何しても貴方を愛する事が出来なかつた、あゝ何たる恐しい家庭であらうぞ、吁々、パウラ、嘘、それは皆嘘、お前は嘘を吐く。」といひながら、エリーンを膝の下に引敷て、其様な嘘を言ふか、お前は私に詫びなくてはならぬ、私は立派な良い婦人

である、私は誓ふ、私は良い婦人である、私は常時も良い婦人として過して来た、如何してお前は、私を良くない婦人などと断言し得るか、お前は嘘を言つた、といひざまに激しく突き放す。途端にオーブレイが其所へ入て来る。そして此有様は何事であるかと問ふ。要するに此場が大破裂に到る前の大葛藤の頂上で、茲所で覺えずパウラの性格に同感する、彼女は情の激したまゝに手暴な事はしたけれども、其心根は他までも純潔で、自分の性質は善良で立派な婦人であると信じて居る。唯境遇が自分に強く逆つて居つた、ゆゑに不品行はしたかも知れぬが、悪人ではない、天性立派な婦人であるとの自信を持つて居るから、今エリーンから過去の事を言つて辱められ、覺えず自分が胸にある事を打出したのである。父が入つて来たのでエリーンは弱つたまゝ、何でもありません。私が悪いのです、私は最うアーデル大尉に二度とはお目に懸りますまい」と言つて、部屋を出て行く。後にはパウラは夫を呼びかけて、エリーンは最早何も彼も悉皆察して了つた、私とアーデルの事も察して了つた、初めから私の性質を疑つて居た、それが原因で私に親まないものであると白状した、といひかけて其所へぐたりとなる。オーブレイはそれを助け

て椅子に着かせ、尙もパウラを慰めて、お前は何かそれを辯解すればよかつたのではないかといふ。パウラ、それは無用です、私の顔に凡てが出て居るといはれて見れば、其辯解の辭は無いのです、あのエリーンのいふ通り、私の生涯は散々汚されたものに違ひない、誰にでもそれは見えるのでせう。オーブレイ、然し其様な考へは娘の頭から取除けるやうに仕なくてはならぬ、全體如何したら宜からう。パウラ、如何する事もありません、一旦疑はれた以上は、それは何處までも消えはしない、一體斯うならない前に貴方が、エリーンが如何私を見て居るかといふ事を注意して下されば宜かつた、今となつては仕方がない。オーブレイは茲所に到つて覺えず、兩手に顔を填めて泣く。パウラは暫時無言の後夫を呼びかけて、私は實に濟まなかつた、最早此儘一緒に居る身の上であるから、自分が身を引きましたやうといふ。オーブレイはこれに答へて、併し娘は斯うなれば再び尼寺に歸つて行くであらうから、お前と私とは依然夫婦となつて居やうと慰めて、抑も先妻と共に接んだ、此家に歸つて來たのが間違ひであつた、此上はお前と私と外國へでも往つて新生涯を始めやう、今までは夢であつたと思つて呉れといふ。此の邊からが全

篇中最も有名な臺詞になる。パウラはいふ、新生涯をまた始めるといふのですか。オーブレイ、これから先きまた幸福にならないとも限らない。パウラ、然し貴方は今夜の此の事を決して忘れてはなりません、二人で茲所へ引越して來て、エリーンが歸つて夫婦の中には風波が起つて犬と猫のやうに睨み合つて、エーテリオン夫人が間に入る、オーレード夫婦が來る、ドラムルが來る、そして最後にアーデルが來る、丸で引續いた永い夢に醒はれて居たやうではありませんか。オーブレイ、然しそれは忘れて了へる。パウラ、貴方は何時も然うおつしやるけれど、奈何して然う容易く忘れられるものではない。オーブレイ、然し我々は唯將來を考へなければならぬ、將來の算段、將來の話、それでやつて往かなければ立ち行くものではない。パウラ、貴方は將來將來とおつしやるが、將來といつても矢張一度は過去になるもの、たゞ是迄の過去と入口の違つた過去であるのに過ぎない。オーブレイ、其様な考へは廢めてくれ。パウラ、でも今夜の事が其の證據ではありませんか、如何しやうが、何所へ往かうが、私がむかし奈何な身分であつたかといふ事を忘れる譯には行かないぢやありませんか。オーブレイ、然し今夜のやうな事は滅多には

起らない世の中は然う狭いものではないから。パウラ、然うかも知れない、夫婦の仲の隔たりに比べれば世の中の方が狭いくらゐ、併し貴方は實に良い人だけれども事情が悪かつた、私の言ふ事を覚えて居て下さい、勿論私は現在には未だ奇麗な女です、私は然う信じて居るばかりでなく、尙ほいつまでも美しくありたいとは思ひます、けれども今でさへもう私の顔には皺が寄つて來ました、眼は窪みかける顔には今までにない暗い影が差して來る、私は段々棄てられて行く身になりかゝつて居る、燕脂や白粉は嫌ひだけれども、それも何日かは人のするやうに塗らなければならぬ、日が來る、そして何時か一度、恐らく案外に早く妙な機會で、貴方は私の顔を見る事がつくづく厭になる。其時貴方の心が變つたら私は奈何して貴方に對抗する事が出來まじやう、奇麗な女といふ武器は私には無く、萎びて、朽ちて、髪は白くなり、眼はどんよりとして、體は骨ばかり、頬はこけて、幽靈、朽ちた船、鳥羽繪、蠟の流れた蠟燭、斯様な哀れな身の末になつたら、奈何して貴方がそれでもといへまじやう、これが貴方の口癖の將來じやありませんか。

オーブレイはパウラの此言を慰め兼て、唯其名を呼ぶばかり。パウラは最早言ひ

疲れて來て私は眠くなつたと言つて、夫の肩に頭を擡せかける。其時室の外から再び友人のドラムムルが歌を唄ひながら來るのが聞える。パウラは私はドラムムルに逢ふのが厭だからといつて室を出で往く。ドラムムルは事情を知らないから、オーブレイの跡を趁ひ、暖乞ひ旁々深夜に拘らず復た來たのであるが、エリーとアーデルの話は、コーテリオン未亡人から今聞いて來たといつてこれを祝すると。オーブレイは、私はアーデルの如き人物を咒詛する、然り自分は今こそ呪つてやりたく思ふ、かういつたら自分で自分を呪ふことになるかも知れないが、男の生涯といふやつを経て來た人間、即ち私や私の仲間等のやつた事柄のため、世間の人は幾ら迷惑を蒙つて居ることか、それが廻り廻つて今こそ我が身上に報ひて來た。これで自分が昔しやつた男の生涯といふ罪業も帳消しになるから、今はこれを呪つても疚しうない、渠咒ふべし、渠咒ふべしと激した體である。この有様に前後の様子を知らぬドラムムルの愕くを更に其の手を把て、オーブレイは、パウラだ、パウラだ、彼女とアーデルと二人は今夜茲所で逢つた、而して彼二人は、滿更の他人同志ではなかつた、と言ひ放つ。ドラムムルは意外の事に愕いて、

オーブリー！一言その名を呼んだばかり。オーブリーは言を續けて、彼れ兎ふべし、哀れむべきは我妻、といふ時エリオンが入つて来る。エリオンの顔色は變つて見える、そしてエリオンは一寸父に来て下さいといふ。オーブリーが連れ立つて室外に出ると、パウラの室に往つて下さい、早く、早く、といつて、父が愕いて驅けて往かうとする、其の手を叩へて、怖さの餘りに、「イヤ、往かないで下さい」と前後忘却の態である。父は振り切つて奥に入る。エリオンは倒れる。これをドラムムルが起こして、何事かといふ。エリオンは、私が先刻パウラに酷い事を言つたものだから、今それを詫やうと思つてパウラの部屋の戸の所まで往くと、室内で人の倒れる音がした、愕いて入つて見たらパウラは自殺して居た、然うです、實に私が悪かつた世間では自殺だといはうけれど、實は私が殺したも同然、私さへ今少し寛い心を有つて居たら斯様な事は無かつたでしやうに、といつて椅子の上に氣絶して倒れる。それを介けてドラムムルが戸を排けて向ふを見込む。それで幕です。(完)

(明治三十九年談話筆記)

劇場問題

日本の演劇もその中身即ち脚本であるとか、俳優であるとか、演藝の方法であるとかいふものゝ改良が目下の急務であると同時に、これと内外相呼應して是非とも變更せられなくてはならないのは、劇場の組織即ち演劇の外形的方面であらうと思はれる。此方面にして進歩しない限りは、中身の進歩が何程著しくても容易にそれが世の中に現はれて来る譯にはいかない。勿論近年川上などが卒先して種々観客の便を計るとか、時間を短縮するとか、書割を寫真的にするとかいふ如き事は大分、手を付けかけたが、まだ、其の外に變更せられなくてはならぬ欠點が幾多も潜んで居るだらうと思ふ。茲所には、他日これ等の劇場問題がやかましくなつて来る時の参考にもと思つて、西洋のそれ等の事に關した二三の事實を述べ置く。

兩三年前の英吉利の劇場で劇場問題の主なるもの——といつても、勿論彼の國ではそれ等の方面は比較的整頓して居るから日本の現状のやうな弊害が深く感せ

られて居るといふ譯ではなく、また弊害が認められて來れば傍から改良せられて行くのが彼の國事物の状態であるから、さして大なる問題もないのであるが、其主なる一二を言つて見ると、まづ第一に開場時間の問題が一時喧しかつた。また席の附け込みの問題が喧しかつた。けれどこれ等は到底徹々たる問題たるは言ふまでもない。

○開場時間の問題 については、前にも其當時言つたと記憶するが、かの英國の脚本作者の第一流であるピネロが提議して、從來概して八時開場の十一時乃至十一時三十分閉場といふのを、種々の點から不便不都合と認めて、少くとも一時間繰り上げて開場し十時乃至十時三十分には必ず閉場する事を主張した。これが一時問題になつて、遂に或る劇場では世間の意見を募つて多数決にして見やうとした其結果が、六時から九時迄といふ説が八票、七時から十時といふのが六十二票、七時三十分から十時三十分といふのが百六十四票、八時から十一時迄といふのが三百三十三票、八時三十分から十一時三十分迄といふのが百〇六票、九時から十一時乃至十二時説が三十二票であつた。勿論これは晩の事で、西洋の劇は一週間一二

度の晝興行の外は必ず夜興行で、時間は三時間乃至三時間半が精々のものである。然して結局此問題は在來の開閉時間に特殊の改正をば齎らさず其儘となつてしまつた。つまり八時開場十一時閉場といふのが多数の風でまた多数に便と認められて居るものらしい。

○席の附け込みといふ問題 は、これは英吉利劇場の特殊の問題であつて、伯林邊りの劇場では如何なる席でも、殆んど凡て席の番號に由つて札を賣出す、従つて其札さへ持つて行けば何時でも席が空て居るが、英吉利では或る席以上でなければ——所謂レザード、シート即ち番號の附いた席はないのであつて、日本の金圓にして一圓二三十錢以下の席は、凡て幕の開く三十分か一時間前から木戸を開けて到着順に観客を入れる、従つて開場前木戸前に人牆を作つて良い席を得やうと立つて待つて居るといふ事になる。此不便を除く如何なる席でも盡く番號札に由つて買ふことにしやうといふのが、改良案の動議であつた。これは新しい劇場で多少採用したのもあつたが、最近一二年には奈何なつたか知らない。次は

○國立劇場問題 である。これと前から英吉利で喧しい問題は演劇學校問題

とで、これは前から英國でやかましい問題である。国立劇場は利弊相半ばすといふやうな反對説もあつて未決また演劇學校は例のツリーなどが率先して始めかけてゐた。是等と關係してかの有名な小説家ゼローム・ケー・ゼロームの提議にかゝる模範劇場といふ問題があつて、これまた抄々しい結果を持ち來たし得なかつたが、茲にゼロームの提案を言つて見ると、英國劇の振はない現状を救ふ爲には是非とも一つの大きな模範劇場を立てなくてはいけない、それは餘り繁華な通路ではない所に設けて費用を減する、そして其劇場は只二部に分かつては宜い、即ち一は舞臺部で、一は觀客席である。そして觀客席はまた從來の如く種々に繁瑣に區別するのを止めて、只一つの大きな觀客席であつて、其席料が場所によつて等級が付いて居れば宜しい。それは凡て四通り位に分けて、一番廉い所は五十錢位で見られるやうにして置かなければならぬ。而して此劇場に出勤する俳優に拂ふ給料は、マネージャーが一週間二百圓、下では一番廉い下廻りの俳優が一週間十五圓位までの所であつて、全體は一週間の費用を三千二百圓位で上げる。言ふまでもなく當時流行の道具書割で眼を驚かす事は一切此座ではやらない、極く簡短な背景

を使つて、餘は觀客の想像に訴へて了ふ。此組織でいけば基本金が十萬圓もあれば澤山である、一萬圓宛出す金持ちが十人あれば成立つ、といふ趣意であつた。ゼロームの此の案が果して原案通りで實行の出来るものか否かは問題であるが、兎に角伯林に在るクライネステアター即ち小劇場といふ名の劇場などの如く、寧ろ小じんまりとした僅に五百か八百の觀客を容れて、而も其觀客が、願くは所謂セレクトフェュー即ち少數識者のみであるといふ風にして、茲所で多數觀客には面白く感ぜられまいと思はれる文藝として高い價值があるといふものを演じて見る。また其作が多數の觀客に歡迎せられるか否かはまだ一向解らないとしても、單に新作であるが故に當るか當らないかを氣遣つて普通の興行者が手を出し得ないものを試演して見る。而して旨く行きさうであつたら他の劇演で演じさせるといふ意味で、模範劇場を立てたら極めて有益であらうと思ふのである。次は

○書割の事である　　が、これらは歐羅巴では目下寧ろ獨乙より英吉利の方がすつと寫實の方に突進して居るかと思はれる。尤も獨乙などでも進んで印象派の油畫式な物を其儘書割に使つて見るなど、いふ事を行つて見るものなどもない

ではないが、概して英吉利の方が寫實的従つて眞物に近い居る。そこで或る者は斯様に書割の寫實的になつて行くのを批難して劇の感興を奪ふものとすらいふが、是非は容易に斷せられない、少なくとも尙暫らくは寫實方面に進んで行くであらう。殊に日本に於いては在來の稚拙不體裁を脱するためのみでも尙多く此方面に進む必要があらう。先年英吉利畫界の耆宿であるアルマ・タデマなどが發起人となつて、主なる書割畫家の爲に會を開いた事がある。其主意とする所は、從來書割畫家は一種特殊な畫家と認められて居た、腕一つで世人が非常な樂みを舞臺の上に與へられて居るに關らず、やゝともすれば藝術家たる地位を認められない、故に書割畫家も嚴然たる藝術家たるを表彰せんが爲め此會を開くといふ趣意であつた。其時ジョセフ・ハーカーといふ有名な書割畫家の話の一節が一寸おもしろいから引て見ると、書割の進歩は一世紀以來特に著しい、最近に到りてはかのアーヴィングの此方面に於ける非常な熱心が目覺しい進歩を喚び起した、また近時此書割を進歩せしむる重なる理由は、第一が電燈の發明である、此光は極めて物を細いところまで明瞭と見せる光であつて、其色が眞白で瓦斯の光などの如く赤

い柔い所が少もなく、また火影の波動が少しもない、それが爲め少しも眞實に背いた事を書く譯にいかない、これが書割を寫實の方に進歩せしむる理由の一つである。次には畫家自からの間の競争といふ事が激しくなつて來た、旅興行に出かける一座は近年は皆其書割を携帶して行く便利が出來て來て、これが爲め從來各座に於て座附の書割畫家を抱へて居たのが無用になつて來て、上手な人に頼んで描いて貰つて何所へでも持つて行ける是が拙い書割畫家を無くする一の理由となつた。(これは言ふまでもなく西洋の書割はドロップスといつて上から下すやうに出來てゐて捲て仕舞ふ事の出來る大きな布に描くから携帶が自由になつてゐるのである。また昔は此布が高價であつたために、一つの布で其座に畫家を抱へて置つて興行毎に塗消して書き更へたものであるが、それが今日では一度描いたものは其儘置つて持廻つて利用する便利が開けたのである。)次は

○俳優の化粧法の事 であるが、これも西洋では専門的科學的に研究工夫するのである。就中白粉の如きでも昔は矢張日本と同じく粉白粉を使つたが、それが近年になつてすつかり油白粉に變つた。これは極く簡短に而かも手際宜く顔の

粧られるものであつて、確か下に一寸特殊な白粉下をかけて置ては其上にその油白粉を塗る、そして顔を粧り變へる時にはそれを一寸拭て取れば落ちて了ふ。で粧り變へるに手間がかゝらない。而して斯様な油白粉が一つの函の中に幾種も色わけをして容れてあつて、恰も水彩畫家の繪具のやうな工合に色の原理によつて分けて具へてある、殊に素人用などになると其色の配合法まで懇に説明してあつて、畫家が種々の色を出すやうに俳優も原理を心得てさへ來れば白粉で色を思ふやうに調合する事が出来る。勿論これは西洋の顔の作り方と日本の顔の作り方と違ふ所もあらうから、一概に今からすぐ日本の粉白粉を廢め西洋の油白粉を使へとは言へない場合もあらうが、西洋のが輕便で而も精妙であるといふ事は事實である。之を日本に應用する工風は一人や二人の専門家が出て研究してもらひたいものだ、それは或る程度以上は藝術であるから到底學んで到る事が出来なして行けば聰明な人ならば譯もなく解る、従つて顔のこしらへ方などいふこともたゞ年所の功を積んでのみ至られる難事業と思つてゐた今までの状態とは變つ

て來る。凡て日本の物事の行り方が昔のは此欠點を持つて居る、凡てを所謂ルー、オブ、サムでやつて満足してゐる、知識的に或る程度までは譯もなく到達せられるものまでも、何だか秘傳でもあるかのやうにして、只漫然無秩序に行らなければならぬとするのは大きな間違ひで、踊、音樂などでも或る點までは新方法で容易に到達する事が出来やう、熟練は其以上にあるので、其手数は半分も省けて了ふ。序でにいふが右の油白粉は獨逸の發明であつて、今から二十年許り前頃から頗る行はれたものらしい。

○終りに　これは私の往つた所ではないが、亞米利加の劇場の事を一二、スクリブナー、ス、マガから引て見ると、紐育で入りのある劇場は一季節二三ヶ月位の間、五十萬圓位の事業をするものである。場内に勤むる人の數は百五十人位に達する。元來此所の劇場にはストックハウス即ち定劇場とコンビネーションハウス即ち寄合劇場とでもいふべきがあつて、定劇場は一季一座で打通し、寄合劇場は幾組かの俳優が入り代つて打つのである。亞米利加では人も知る如く倫敦、巴里邊から盛んに一座を買ひ込んで行くのであるし、従つて歐羅巴の作者及び俳優は亞米利

加を一の常得意として、如何な名優名作者も皆亞米利加に其作や藝を出さないものはない。佛蘭西第一流の作者サルドゥウの如きは自身の事務所を此地に設けて自分の作を演じたいと思ふ者には其所で直接談判をさせる。けれども多数の作者は作の興行権を座主に賣渡し、または委託して置いて自分では其衝に當らない。それでこれら亞米利加に於ける作者の所得は中々澤山になるものもあるが、時には甚だ少ない場合もある。普通には凡そ一週間の總上り高百分の五位を作者が得る。翻譯劇の場合には興行権料は別に支拂はないのが例である、それで翻譯者には幾分かを出すは勿論ではあるが、併し其収入は些細である、これらが翻譯劇に碌なものゝない一つの理由であるかも知れない、で稀に一晚五十圓位になる斯種の作者は先づ上等の部と見なければならぬ。かのオペレッテ即ち滑稽オペラなどの作者には却て非常な所得がある場合がある。有名なギルバート、エンド、サリヴァン合名の滑稽オペラ作者の如きは二萬圓の總報酬といふ申込を斥けて却つて版權料として二萬四千圓を算し得たといふ事である。さて劇を打たんとする場合には座頭が先づ其劇に要する書割、道具、衣裳、音樂及び舞臺幹事の指圖の下に稽古

等の次第書を拵らへて、それに依て一々行ふ、書割は、座付きの畫家が居る場合には、皆非常に大きな専門の畫室を具へて居つて其費用も大したもので、有名なものになると一寸したもので二百圓位はかゝるし、五百圓乃至一千圓位に及ぶ場合がある、而してこれに種々なものが加つてどうしても一芝居の書割が、少し手の込んだものになると一萬圓内外はかゝる、其外に道具の費用は別である。樂器はそれを作る店の名を大きく打つて其樂器の良い所を廣告する爲めに無代で貸して呉れるものが幾らもある。衣裳は俳優持ちと座持ちとあつて一定して居ない、而して近年オペラグラスの進歩と共に瞞しが利かなくなつて、中には非常な金をかけるものがある。或る滑稽オペラで二十人許りのコーラスの女が悉皆二百圓内外の上衣を着たといふ話もある、また或るコーラスの女には盡く一足四十圓程の白の革靴を履かせたといふ話もある。かやうにして衣裳ばかりに二萬圓は直ぐにかゝる、勿論寫實劇になると極く粗末な衣裳で済む場合もある。またステージ、マネージャー即ち舞臺幹事は定劇場では大抵座附に抱へてあるけれども、時としては特別な舞臺幹事が要る場合もある。かやうな時には一週間百五六十圓位づゝの給

料を出して二ヶ月の間稽古の済むまで抱へて置く。かやうにして良い劇を舞臺に上すまでの費用が二萬圓か三萬圓位はかゝる。また一座の總頭たるマネージャーの下にはビジネス、マネージャー即ち事務幹事とステージ、マネージャーたる舞臺幹事とがある。事務幹事は芝居道に所謂フロント即ち幕外の一切の事務を掌り、舞臺幹事はバック即ち幕内一切の事を取扱ふ、而して此兩幹事の下に俳優事務員、道具方、樂手、電氣係、書割係などいふ種々の機關が附屬するのであるが、普通には興味がない事と思ふから茲所では省略して置かう。(明治三十九年談話筆記)

演藝雜談

今回は演藝雜談と題して専ら演劇及音樂の方面に關した事を述べまじやう。ただ歸朝以來何となくゾワ／＼して居るが爲め、一向に纏まつた事を取り合せる餘暇がないから暫時これで御免を蒙つて置きたいのです。目下歐洲の文藝全體の範圍で尤も活動して居るのは演劇であらうと思ふ。其演劇が所謂オペラなどに於て音樂と連絡して自から此二つの方面におもしろい事が集つて來る趣きがある。尤も音樂といつても純粹の音樂其者としては今新たに目覺しい氣運が動て來て居るとか、又は左様いふ方面に特にもがき進みつゝあるとかいふのではないのですが、これがオペラの舞臺に上つて來ると其所に何か大なるものを出したいといふ機運が生じて來るのです。音樂は御承知の如く何といつても獨乙が中心であつて、英吉利の音樂は勿論其特色をたづねて無いといふのではないが、然しながら世界の國民音樂の中に持ち出して重要な地位を占め得るものとは言ひ難いのである。佛蘭西には歴然とした國民音樂がある。亦伊

太利にもそれがある。露西亞にもそれがあるが要するに國民音樂の尤も特色あつて且尤も近世的であるのは獨乙である。佛蘭西の音樂は全體にいへば輕妙といふ點が特色であらう、伊太利音樂は色彩豊富といふ趣きでしやうし露西亞の音樂は一方妙に感情的で、亦一方那邊となく神秘的といふ氣味でしやう。獨乙の音樂は深さ及大きさに於て尤も特徴を示して居るが、若し英吉利の音樂に特徴を求めたならば、滑稽物であるとか亦は讚美歌的な物などは却て他國の眞似の出來ないものがありまじやう。英吉利に於ては一寸した料理屋の音樂であるとか、ホテルの客室でやる音樂であるとか、其外通俗的な場合の凡ての音樂が概して滑稽物か、然らずんば極めて卑近な流行物などといふ趣きであるが、然し獨乙に行けば一寸した場合の音樂にも却々氣取つたものをやる、ワグナー物であるとか、ベートーフェン物であるとかいふやうなものを、さらにやる、然して多數の聽者が相應にこれを受け樂んで居る。これらの點から見ても音樂的趣味は獨乙の方が一般に進んで居ると思ふ。

現時歐洲の音樂界でワグナーのオペラに於けるが如く、シンフォニー及び其の類の

音樂に於て第一の音樂家と許されて居るのは勿論ベートーフェンである。如何なる音樂會にも此人の物の出ない事は先づないといつてもよろしい、例ば彼の第三第九のシンフォニーなどいふものは必ず大なる音樂會の飾りとして出て來るものである。亦家庭などでもピアノの一つも置てある家には必ずベートーフェンの肖像位は懸けてあるといふ趣きである。オペラも此人は一生に唯一つ「ファテリオ」といふものを作りましたが、これは珍しいものゝ一つとして伯林などでも屬次演せられる、然し到底オペラとしてはワグナーものなぞには盾を衝く勢力はないのである。彼の特色は到底オーケストラの純粹音樂に止まつて居るのである。

而して單に音樂者の立場からいへば、ベートーフェンとワグナーとの比較に付ては種々な議論があるやうです、例ば音樂といふものが其最大要件の一としてメロディを必ず具へて居るべきものとすれば、ベートーフェンは正に其圓熟を示したもので、ワグナーのは其破壊を示すといふ氣味がある。先づ今までの所音樂を音樂として成功の頂點に達したのはベートーフェンであつて、ワグナーは音樂から外へ一歩を踏み出した氣味ではないか、更に言ひ換へれば音の形式的調和といふ事が、ワ

グナーに到つて思想の複雑といふことに破壊せられて了つて、思想が勝ち過ぎて音楽といふ形式が負けて了つた趣きがありまじやう。勿論一層大なる標準即ち文藝全體から打算しましたなら、ワグナーの方が或は一層高いものかも知れんが、併し音楽といふ様式からいひますれば、ベートーフェンの方が一層圓滿のものかも知れない。併し之は音楽者が音楽者としての意見の一面を私が茲に掲げただけであるから、此際に對する私自身の議論ではないこと、御承知を願ひたい、兎に角斯様にして音楽界に於けるベートーフェンの勢力といふものは大したものである。現在の獨乙の音楽作者としてはリヒャード・ストラウスなどが尤も有名な人であつて、此人はオペラも作つたし、亦シンフォニー、オーバチュアなども作りましたが、其オペラは餘り流行つては居らぬ。確かシンフォニーの中でしたらう、かのニーチェの「ユーパーメンシユ」即ち「超人」の思想を其儘音楽に謠ひ試みた人である、か様にストラウスの傾向は、寧ろ感情でなく思想を音楽にして見せやうといふ點にあるやうです。併し思想を音楽にするといふ事は非常に至難しい、亦種々疑問のあることではやう。ワグナーは或る程度まで思想を音楽にした、然しながら其思想は劇化せ

られ、而してこれを通して感情化せられた思想であつて、ストラウスの考へる如く思想そのものを直に音楽化する事は、果して成功すべき様式であるか否かは頗る研究を要すべきものであらうと思ふ。

家庭などで一寸ピアノにかけて多く弾かれる音楽は、極めて新しいものを除いてはモツァルト物、亦はベートーフェン物などの外、ピアノ音楽の名家たるショープン物などが屢々弾かれる。此ショープンのピアノ音楽は人に由つて好き嫌ひのある性質の音楽で、非常にセンチメンタルでリ、カルである、日本の音楽でいひましたなら長唄義太夫といふ方面よりも寧ろ新内または常盤津の方、亦聲で言つたらバス。テノアよりもソプラノの方に近いて居るといつたやうな特色でしやう。私などは寧ろ好んで聴いた方であるが、女で少し氣性の勝ち過ぎたものなどにショープンの話をしまするとツツスキート即ち旨過ぎて困るといふことを能く言ひますが、併し兎に角ピアノ音楽ではベートーフェン、モツァルトなどの大なるものを除て、尤も多く弾かれる一とつはこれである。

ヴァイオリン音楽に關しては特に作者の秀でたるものを擧げるのは困難なやうで

すが、彈手に中々名人が出て來ます。最近英國で賣り出した若い女樂師のメーリ・ホールなどは著しいヴァイオリンの名人として、尤も有名な一人である。いふまでもなく西洋音樂の樂器の數ある中で中堅になるものはヴァイオリンであらう。誰にも容易に習はれて癖がなくて好いといふやうな意味から、素人間に廣く行はれて居るのは無論ピアノであるが、而し真正に複雑な人間の感情を淋漓揮灑し來るものはヴァイオリンに如くは無いと思ふ。オーケストラ音樂ではヴァイオリン乃至其他の絃器の外に、諸種の笛も重要な地位を占めて居りますが、而し矢張中堅はヴァイオリンにあると思はれます。

オーバチュアといひますと、例ばオペラの幕の始めに、其オペラ全體の思想を約めて奏するといつたやうな性質のもので、オーバチュアといふ名もそこから來たものでしやうが、而し勿論獨立してオーバチュアのみ作つたものもありますし、亦オペラに附屬したもので、音樂會などでは引離してやることが屢々あります。要するに獨立した一の音樂の様式と申してよろしい。例ばワグナーオペラの「ローエングリン」の始め幕の開く前に奏しますものゝ如きは、屢々音樂會でやる一

つであつて「ローエングリン」の一番目貫きの場即ち男主人公が白鳥に船を曳かせて遙かの彼方から女主人公を救ひに出て來るといふ其趣きなどを、音樂の調子一とつで見せて居る。即ち最初に先づ色でいつたら薄い青のぼかしといつたやうな低い靜な廣々とした音を聞かせて一面平坦の地盤を作つて、例ば長閑な蒼空とでもいふやうな考へを起させて、人心を靜めて置く。さて其寂とした處へ、始めて微に一道のポツリと出て來た白雲といつたやうな、際立つた麗はしい音を加へて來る、而して此一點の新しく出て來た音が次第々に發展して來て、その指頭ほどなものゝ漸次に拳ほどな大きさになりそれが亦頭程の大きさになるといつたやうな形容で、遂に一羽の大なる白鳥となり、其後には船に銀の鎧に一身を堅めた天の騎士ローエングリンが現はれて來る、而して種々な複雑な出來事があつて、而して亦再び其騎士及び船は遠くく小さくなつて去つて行く、そして遂に前の青空一碧の寂しさに歸つて來るといつたやうな意味を、一曲の音樂の中に現はして見せる。亦これは私は聞かんだが、聞た人からの話で露西亞のワグナーと呼ぶるるチャイコフスキーのオーバチュアに「一八一二年」と題する有名なものがあつ

て、これは蓋し此年に於けるナポレオン一世が露西亞で敗北したあの戦を音楽に仕た有名なもので中々にもおもしろいものださうです。始めに先づ佛蘭西の國民樂たる「マルセーユ」の調子を聞かせて、ナポレオン一世の露西亞に進軍する趣きを見せ、而してそれが順次に進んで行くと、自から露西亞の國民樂の調子になつて、而して最後に此二つの國民樂が非常な力を持つて相争ふ趣きを見せる、かくて次第に露國の國民樂の調子が、佛國の國民樂の調子に打勝つて、前の目出度平和の態に歸るといふ組織である。

オペラは目下先づ獨逸の専有物であるといふ形ちで、英吉利が盛んに國民的オペラを作りたいたいと踴いて居るが、何うも出來ない。佛蘭西のオペラも、伊太利のオペラも到底獨逸の全盛には敵することが出來ない状態である。英吉利ではコミックオペラ(滑稽樂劇)に屬したものは却々盛んに出て居ますが、眞面目なものでこれが國民的と誇るに足るべきものは先づ無いといつてもよからう。此コミックオペラの名人ではアーサー・サリバンなどが尤も知られた人であります。獨逸ではフンパーディングなどが眞面目なものゝ名家で、最近の新作が一つあつて評判であつ

た。また伊太利の音樂者レオンガバロといふ人が獨逸皇帝の依頼で作つた「ローランド、フォン、ベルリン」といふのが伯林に於ける新作オペラの中では尤も評判のあつた一つであります。これは筋に付ての細かい事は別に話すが、つまり獨逸的材料をレオンガバロ式即ち伊太利音樂者の手に作つたもので、其缺點は茲に在つたやうです、言ひ換へれば獨逸的材料は矢張ワグナー的に深さを以て優るオペラにするのが一番容易い成功の道であるのでしやうが、伊太利音樂者の手にかゝると矢張それが伊太利的になつてしまふのです、即ち音樂的に光彩はあるが、戲曲的の深さがなくなつて了ふ。

これと好一對の話と思はれるのは、かの佛蘭西の有名な音樂作家グノーが作つた「ファウスト」です。是れは第一に主題が主題であるためか、獨逸などでも、ワグナー物を除いては、最も重要視せられ、また最も多く演せられるオペラの一つですが、材料が獨逸的で而して之れを取り扱つた人が佛蘭西人であるため、前の「ローランド、フォン、ベルリン」と同じく、海のものとも、山のものとも附かないといふ缺點が、矢張りあるやうです。

歐洲のオペラの世界でワグナー物の外に普通に屢々演せられるオペラといふと、右に言つたグノーの「ファウスト」であるとか、獨逸のヴェーバーの「フライシュツ」であるとか、伊太利のヴェルデの「アイダ」亦は「ツロバドア」であるとか、獨逸のモーツァルトの「ドンイワン」、「ファガロス、ホ、ツアイト」、佛蘭西のビゼーの「カーメン」とかいふやうな、斯様な種類のものであります。而し何といつても人氣の立つて居るのはワグナー物で、ワグナーは歐洲の文藝世界に於て尤も人の注意を引いて居る一とつであらう。またワグナーの人氣は恐らく今が頂點ではあるまいか。ワグナーオペラに付ての事は亦別にお話する機會があらうと思ひます。

終りに臨んで一言附け加へて置きたいのは、音楽と歴史との關係です。精しく言へば、音楽は最も密に人間の感情を調するものである。而も其の感情は殆んど裸體のまゝで音楽に出て來る。是れが音楽の特色の一つでありましたやう。而して感情といふものは思想に比べて、さう容易く變動するものでない。また従つて、尤も個性的の特徴を多く帯びるものも感情の方面です。されば斯くの如く殆ど感情のみの藝術と言つてもよい所の音楽が、個人若しくは國民間の種々な性質の相

違を如何なる程度まで統一し得るか、個人の上では、成程概般的の方面を見出だして統一し、誰れに聴かせても略同一の感銘を與ふるといふ程度に達することが出来るかも知れぬが、國といふ相違、若くは今一層廣い、東西洋の相違といふやうな範圍になると、果して音楽は全然東西相通するものとなり得るか、過去の長い歴史で養はれた東洋特殊の感情が遺憾なく現在の西洋のメロディーで調べられるであらうか。想ふに我が音楽界目下の最大問題の一は是れでありましたやう。是等の問題を解決せんとするの勇氣を振り起こして、他の繪畫界、詩歌界に劣らざるやう、目ざましい活動を企てられんことを、殊に新進氣鋭の音楽家諸君に希望の至りに堪へません。(明治三十九年談話筆記)

オペラ雑感

私は英吉利と獨逸とでオペラを観たのですが、それに付て思出したことを雑感として述べませう、英吉利で聞たのは第一がローヤルオペラ座であります、英吉利本國のオペラといふものはまだあまり立派ではありませんから、獨逸で夏のオペラのサイゾンの濟んだ頃にロンドンへ獨逸のオペラを呼んでやらせるのであります、勿論英吉利にもスタンフォード、サリワンなどの如き作者はありますがナシヨナル、オペラと誇るに足る者は先づ無いのであります、故に自然獨逸のオペラを招く外はないのです、英國には有名なオペラ、コムパニーが二つありまして其一をカールローザ、コンパニーと申しまして他の一をムーデー、マンナー、コンパニーと申します、此二つのコムパニーとてもコンダクターは獨逸人が多いのであります、歌ふ人も手の足りない所から大陸の者を呼んで來るのである。

勿論一切英語で歌ふ、獨逸物佛蘭西物は皆英譯して歌ふのです、私が初めて英吉利でオペラを観ましたのは前申した如くローヤル、オペラに於ける大陸オペラであ

りました、作は伊太利のヴェルデーの「アイダ」であつてヴェルデーは御承知の如く伊太利のオペラ作者中の大家であります、此作の筋を摘んで云ひまするとアイダと云ふエシオピア王の娘がエジプトに囚はれて居る内其の主人たる女公主アリネムスと二人ともラダメスといふ一人の勇士に戀慕して、さうして其男は寧ろアイダの方に心を寄せて居る、所がアイダはラダメスを誘ひ敵軍の内情を漏らさせる其爲めに愛人たる勇士が捕はれる、さうして有名なる幕は第三幕であります、上が寺で其床下に勇士が押込められて居る、アイダは父の爲めに男に裏切りはさせたが自分の愛したる男であり男の清き愛も貴しで共に床下の牢屋に這入つて懺悔して共に死ぬと云ふのであります、眞暗の床下には勇士が押込められて其入口にはアイダが立て煩悶して居る其上には莊嚴なる讀經の聲が響く、アムネリスの愁嘆の聲が聞える、さうして是れに伴ふべき悲恨の音楽があつて頗るアッフエクチーヴの幕であります、埃及を題目としたのであります、思想も東洋的でローマンチックでミステカルな神秘的なものであります、それを私が初めて聞きました、伊太利オペラでありますから言葉は分らなかつたが忘れられぬ一種の感

を惹いた、其次に聞いたのはワグナーのツリスタン、ウンツ、インソルデでありました。其時に私はオペラは全然能であると云ふ感じを起しました、なせさう云ふインプレッションを得たかと云ふことを今考へて見ると、其主なる理由は第一題目が東洋的でメヂェバル即ち中古的であつた爲めに直に日本の能と聯想したのであります、能も中古を代表するもので日本の中古と西洋の中古とは思想の上で似て居る點が多いと思ふ、而して能は宗教的で超人間的である、今またアイダなども同じ趣味を以て居る、それでオペラは能と似て居ると考へたのであります、第二の理由は素人が西洋の音楽を聴くと嗜れやかな喜ばしい、艶のある所よりも寧ろ濁つた重い莊嚴な乃至は悲しい方面の音楽は慣れると分かり易くなる、そこで私が始めてオペラを聴いたときも其の方が耳に這入つて來て、解するにむづかしい方の調子か頭に餘り深く残らなかつた爲めに能のやうだと考へたのかと思ふのであります、第三の理由はアイダの女主人を歌ふた女は良くなかつたので女聲部が負けて、勇士をやるテナーの方とかアイダの父をやるベースの方とかが良かった爲めに、艶麗の方面を聽落したのであります、今番附を調べましてもアイダを

やつた役者は佛蘭人でありますから、是は完全なコムパニーではなかつたかと思ひます。

それに次にロイヤル、オペラ座で見ましたのがムーデマンナターの組でありました、英語でやつたのであります、此時は佛のビゼーのカーメン、ワグナーのローエングリーントン、ホイザー、また佛のグノーのファウスト等を見ましたが、此たびは更に前とは違つた第二のイムプレッションを得たのであります、即ちオペラは要するに動作の這入つた淨瑠璃ではないかと思つた、けれども獨逸に於て、それを齣つて考へて見ると、それも間違つて居た、今なせ私が淨瑠璃と思つたかと云ふことを考へて見ますと、第一の理由は、先づ「カーメン」を聞きましたが、「カーメン」と云ふのは筋が近世的である、カーメンと云ふ感情の強い巻煙草屋の雇女に成つて居る女があつて、其女が朋輩を殺して捕はれた然るに番兵を色仕掛けにして欺いて遁がして貰ふ、其番兵は是が本で零落して妻子をも捨て、カーメンと近けた、併しカーメンの此番兵に對する戀は一時の事で、斯やうな感情好惡の強い女の常として直ぐ醒めて之を振りすて、輕業師と逃げて了ふ、其兵士は妻の眞實な愛の爲に救はれんとし

たが、又「カーメン」を追駆け遂に之を殺して仕舞ふと云ふ筋であります。近世的な、新聞の三面記事的な所があつて今の小説芝居的思想であります。それから第二の理由は外國のオペラを英語に譯して打つたのであるから音楽と英語の文句と調和しないやうな感じがしました。聲の樂と器樂とが離れ、くに競争して居るやうで、眞面目なるべき所が滑稽になつたりなどして何うもしつくりと行かず、それが、爲めに音楽として魅せらるゝ力が薄くなつて寫實的の背景計りが目に附いて、近世々々して何所ともなく淨瑠璃を聞いて居るやうな感じがしたのである。フアウストを見て、悪魔の出て来る所とかメフストフェレスの動作とかを見ると寫實的の方面のみ目に映じて、あのへーギーな莊嚴な所は感じが破れて聞へました。それで「オペラ」は謠曲よりは寧ろ淨瑠璃と云ふ考を漫然起したのであります。

それから伯林に参りましたが此處はオペラの本場でありますから大分研究的に観ることが出来ました。生きて居る作者の物ではフンバチンクの「ヘンゼル、ウント、グレーテル」と云ふお伽オペラを初に観ました。それから伊太利のレオンカバローに獨逸の皇帝が頼んで作らせた「ローラント、フオン、ベルリン」と云ふのを観ました。

又ワグナー物はパーシフルリエンデを除いて凡て見て二三度に及んだのが多いのですが、外に参考として近世ローマンチックオペラの近祖ヴェーバーの「フライシニツ」を観ました。それから又たマエルベヤーの「ヒューゲノツテン」ロルチングの「ウンディーネ」ヴェルデーの「ツラバドア」等をも観ました。而して是丈の範圍で眺つて見ますると、藝に能とか謠曲とか考へたのが間違ひである如く、淨瑠璃であると考へたのも間違ひであると云ふことに到着しました。結局オペラは其以外の物である、其理由を考へますると、第一ワグナー物でもヴェーバー物でも通じて其思想の上から言ふと、殆ど全體の流行として中世的で超人間的でローマンチックであつて獨逸の、ザーグ即ち傳説から採つた、あの思想がオペラの生命になつて居る。故に謠曲に似て居ると最初は考へたのであるが、併し題目は中世的であつても取扱ふ方法は、十九世紀的であつたのであります。即ち寫實的若くは戯曲的に取扱つたのであります。茲に言ふ寫實的と申すのは、方法の寫實的なるを云ふのでありますから、サブゼクトはローマンチックでも構はぬのであります。誰が物を言ふと云ふやうなこゝとは世間で所謂寫實的ではありません。龍と云ふ概念を龍らしくして觀せれば

矢張寫實であります。成る可く其物に見えるやうにシンボリズム即ち標象的といふことに對する寫實的と云ふのでありますから、言ひ換へれば部分を其物らしく拵へると云ふ意味で寫實的と云ふのである。此意味に於ての寫實でオペラを十九世紀的に取扱つたものである。其例として擧げると背景は非常に進歩して居る。故に背景が寫實的になつて居る。それからワグナー前後の「オペラ」は人間の感情の動き方を寫實せんが爲めに音樂のメロデーを犠牲に供した形がある。ライト、モーチーブを使ふとか、人の性格の違ふだけ音樂に區別を附けて往くとかした爲めに音樂に無理がありはしないかと思はれる程になつて來たワグナーといふ力の強い人が來て一方に音樂又一方には戯曲又は人間の行動といふ強い鐵の棒があつて、本來は容易にあざなふ事の出來ないものを力任せに強引に引寄せて一緒に綯ひ交せたやうな形があると思ふのである。即ち吾々の感情を中心として音樂を取扱ふと同時に、中古の思想を近世の方式で取扱つた一種の不思議なものである。故に、オペラは能とは違つて居る。能は中世の思想を中世的に扱つて居る。是がオペラの能でない所以であります。

ワグナーは寫實的でありながら而も寫實的にならないといふ一種の妙味を解して居ると感じたのであります。能の動作は既に意味の動作であらうと思ひますが、オペラの動作は尙未だ十分なる意味を顯すの動作でなくして、吾々が強い感情を持つと其感情が色々の態度を要求して來る。悲しいときは俯し、又大きな事を考へるときは手を廣げる、それを角立たぬやうに眼に立たぬやうにやるのがオペラの重なる動作であるかと思はれます。芝居的の動作をすると音樂を離れて、圓いゼネラルな婉曲な優美な形が無くなつて壯士芝居的のようになるのですが、ワグナーには之れが少ない。例へばワグナーの「リング」の初め「ラインゴールド」の中で神々の間に色々いささつがあつて大な斧や棒で以て立廻りをする。其場でさへも立廻りには成らない。又芝居にもなつて居ない。一種の振事といつてよいやうなものである。其處杯も注意したものだらうと思ふ。兎に角ワグナーは極端なる寫實になる弊を防いで居る方面がある。

然るに外の人の作を見ると之はむつかしいと見えて其調和が破れて往く。寫實ならズツと寫實になる又音樂的になれば、ズツと音樂的に成る。伊太利オペラに返へ

る、さうしてドラマタイズした傾向が跡戻りをするのであります。ドラマが音楽の爲めに犠牲に供せらるゝのであります。それで寫實的で思想が複雑になつて來たり滑稽も這入り艶も這入ると扱ふことがむづかしくなるのでありますから、ワグナーにして初めてやつたのですが、腕の弱い作者になるとワグナー式では出來ない、或は寫實的に陥るか或は音楽的になるか或はどちらともつかぬ不調和なものに成る、併しながらワグナーでも不調和な所が動もすると出る、例へば「リング」の「ジーングフリート」の中で主人公が龍を斬るときに怪龍が岩の中で物を言ふ邊以下になると、自然以外ではあるが動々もすると自然以下に落ちるため、音楽の魔力を離れ、ば同時に感興を醒ますやうな傾があります、ワグナーですら斯う云ふ所もあるのである。然らば將來はワグナーがなした中古思想を近世的に扱ふと云ふこと又音楽と戯曲とを調和せしむるといふことも、今のオペラの状態では破れて往きはしないか、ワグナー風のオペラは亡んで仕舞やしないかと云ふと、其れは必しもさう言へないワグナーのやうな人が出れば又出來るかも知れぬ、只注意すべきは、近時純粹の芝居は筋の大きな物は持切れないやうな傾向があるのであるから、之を

補はんが爲に、芝居が或はオペラに赴きはしますまいか、而してオペラの方にも何か不足な物があるのではないか、斯くして上からと下からとの會合點に或新しい物が出來やしないかといふ疑問は提出せられます。是で此話は止めやうと思ふのであります。(明治三十八年談話筆記)

舞踏とオペラ

西洋のダンス(踊)と日本の振事とを比べて見ますると、西洋のは只動くばかりで、日本のは其動作に意味が整つて居るといふ事を申す人がありますが、西洋にもダンスで一舉一動に意味を含んで居るのがあります、其一舉一動に意味の在るダンスを以太利式のダンスと申しまして、意味の無いダンスを佛蘭西式のダンスと申して居る、それで二十年ばかり前の雑誌を見ますると、其時分には寄席では以太利ダンスは餘り流行しないで、佛蘭西風のダンスが流行るなどといつて居ります、而して佛蘭西ダンスは概して佛國英國などに源を發したもので、例へばスカールダンス(裳踊)亦是ステップダンス(足踏踊)といふやうなものが、其佛蘭西ダンスの重なるもので、これらは快活なものであるから當世に向いて居ると書いてある、そして二十年後の今日は奈何であるかといふと、矢張寄席などでは此の種のものが多く喜ばれて居る傾きがある。

で、日本にあります凡ての種類舞踏に就て見まして、假りに小別をして見ると、全體の上に只一と調子の感情を現はすのを目的とするもの、即ち勇しいなら勇しいといふ感が、全體の動作の上に現はるればよいといふもの、また艶なれば艶といふ情が現はれば夫でよろしいといふやうなのが此種類である、劍舞の如きは其一例であるが………勿論これはまだ生硬なもので藝術の中に入らないものかも知れない、それからまた所謂振事とか所作事とかいふものゝ一部にも、只艶麗といふが如き感情を主にしたるものなどがある、そこでこれらを抒情的とでも名付けて置きましょう。

それから次に全體の形式美を現はすを主意にして居るもの、これは日本の多くの手踊といふ中に屢次見るところのものである、別に感情を瞭然現はすといふでもなく、只手の動き方、膝の動き方、袖の襷り方などに、ギクシヤクシないで、一種の圓味を持つて、言はゞ曲線の配合色彩の配合といふやうな形式美の類を現はして、人目を喜ばしむるもの、假りにこれを形式美的と名付けましたやう、従つて形式美的な舞踏は、其動作は概して優美一逼に流れる氣味である。

でこれらは管に日本ばかりでなく、西洋のダンスでも、要するに此二ツを中心にし

て居ります。

次には即ち一舉一動に、或る程度まで悉く意味を持つて居る、言語の役目をする舞踏、それは假りに戯曲的と名付けましたやう、日本の振事所作事の中にあるのが其例で、前に申した以太利ダンスも即ち此意味を持つて居る。其他今一とつ數へて置くべきは肉體上の自然の要求から來る動作で、これはかの演説の身振りといふやうなもの、と連絡したものでしやう、例へば大きな聲を出すことが必要の場合には、自ら胸を擴げるとか、非常に感情の激して居る時には、不知不識其邊を往きつ戻りつしたりなどするといふやうな意味の種類である、假りにこれを生理的とも名付けましたやう、これも亦た舞踏といふには當らぬといふかも知れませんが、併し實際或る程度まで藝の中に入つて居ると思ひますから、茲に加へて置きます。

かやうに舞踏の種類を素人考で別けては見たが、今の歐羅巴で、かゝる方面の藝の頂點と見られるオペラに就て申して見ると、オペラの中にある舞踏の程度は頗る複雑で説明の困難なのが解りましたやう、能く日本から往つた人が始めてオペラを見て、オペラは能であるといふ、それも無理でないといふ理由もある、ある程度まで

は能式であるが、亦た決して能一式でないことは明らかである、之れを動作の上から見ますと、能には私の見た範圍でいふと、無論第一の要素として戯曲的動作がある、次にそれが醇化せられて抒情的にもなる、また恐らくある程度まで形式美的にもなつて來て居る、けれども生理的の動作は殆んど入つて居ないやうである、これに反して西洋のオペラには、何しても彼の通り聲を主にして、そして踊る人が凡て自から謠ふのであるし、且つ聲も性質が専門的科學的に判然と區別せられて、男聲部でバスはバス、テノアはテノア、女聲部でアルテはアルテ、ゾブランはゾブランといふ工合に、聲が精煉せられて、そして舞臺も何千人を容れるといふ大劇場の中に、隅なく響き渡る量を持つて居なければならぬ爲、聲を出すといふ其事が、既に非常な肉體的の働きである、従つて此働きの應ずる生理上の態度が舞臺の上に出でざるを得ない、即ち此生理的動作を美術化して舞臺上の藝に入れる必要がある、そしてオペラは寧ろ此種類の動作から出發して、抒情的となり、形式美的となり、戯曲的となつて來る氣味がある、之に反して能の動作は、逆に戯曲的から抒情的の分子を加へ、形式美的の分子を加へ來つた趣ではないか。但し此邊のところは尙ほ専門家

の教へを待つて論斷すべき點であらう。

眞面目なる方のオペラの動作は、かやうな意味で、戲曲的、抒情的、形式美的、及び生理的の凡てを含んで居るのですが、それが漸次拙いオペラになり、若くは所謂滑稽オペラなどになると、一方は戲曲的舞踏を通り越して、舞踏ではない、ただの寫實的動作になり、亦た一方は單なる形式美的の舞踏になり、此二つのものが不調和に混合して出来上つて居るやうな形ちになる。

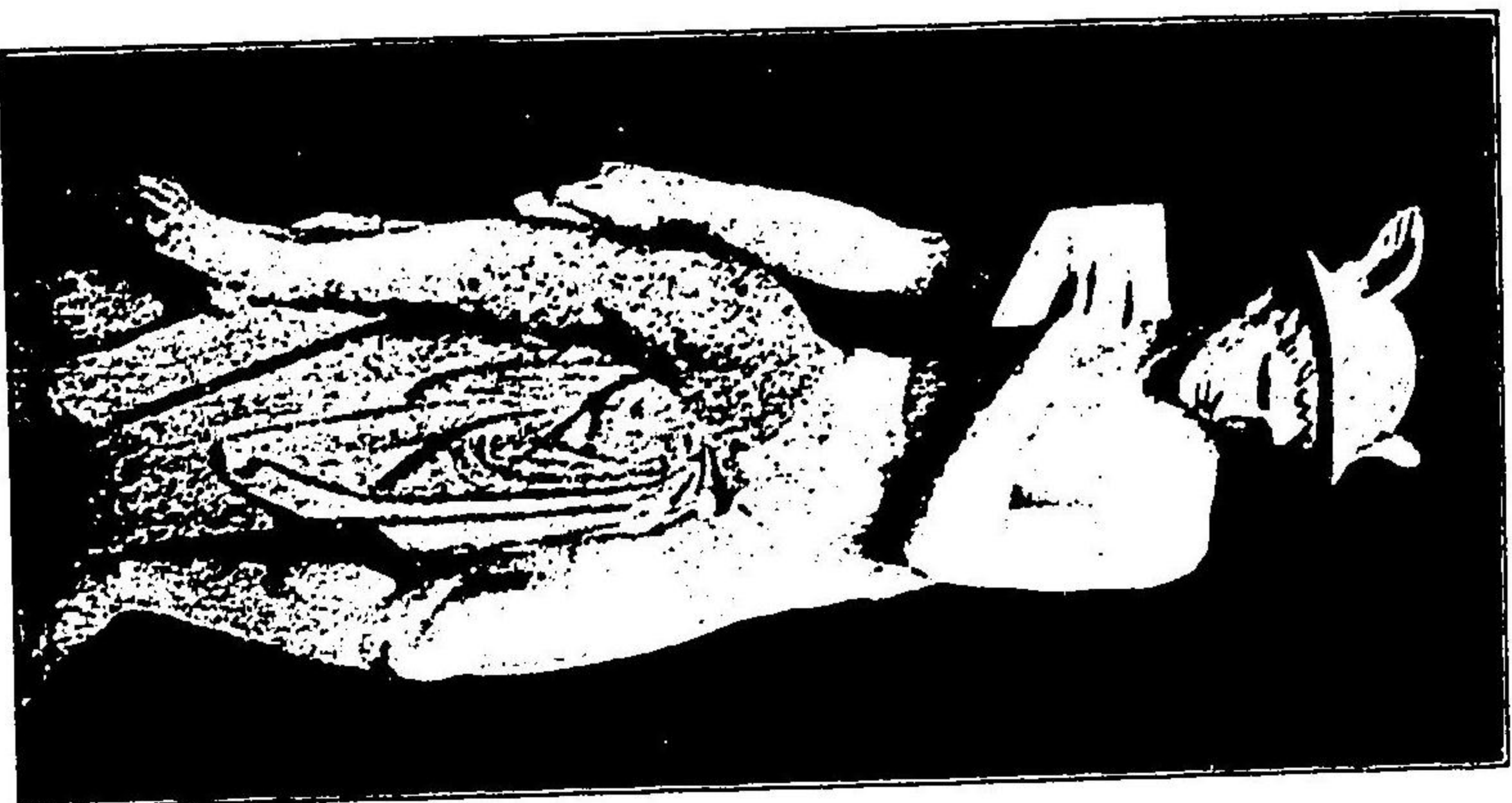
尙ほ踊りに就てモ一一言を加へて見ると、西洋の寄席亦はお伽芝居、滑稽オペラの類に出て来る舞踏は、いふまでもなく、多くは形式美的な程度なもので、抒情的なものとは割合に尠い、またあつても其現す所の情たるや極めて快活な、賑やかな、調子の急なものであるが、それでも近頃優美な、緩やかな情調を現はすもの、即ちより多くシンミリとして日本の踊りに近づいて来るものが、漸次多くなつて来たやうに思はれる、而し一方には亦た亞米利加から這入つて来るデモクラチック(衆俗的)の盛んな勢力に壓倒せられるのは、あらゆる方面皆同じことで、舞踏の上に於ても寧ろ俗なものか却て行はれて居る、其最好例は二三年來歐羅巴の寄席社會を風靡して、

一層眞面目な藝に迄多少の感化を及ぼして居る所のケーキ、ウォーク(菓子踊)といふ踊りである、先達て川上君が黒人踊りといふものを演じたといふ話を聞いたが、それがケーキ、ウォークであるかどうかは私は見ません事故知らぬが、兎に角此勢力は大したもの、で亞米利加から英吉利、英吉利から佛蘭西及び獨乙へと渡つて行つて、現に一二年前の新聞などを見ると、佛蘭西では此の踊りの侵害を防ぐため是れが撲滅案を一部の藝術家が唱へて居た位のものである、此踊りは確か亞米利加の印度人から出たもので、菓子を前に据えて置て、其前で數人の男女(大抵は男と女と二人が、男は杖、女は蝙蝠傘を持つて、男はシルクハットを目の上に乗せて落ちて冠つて、相共に或は後に反り、或は前に反つて、醜い腰付きをして踊るものであつて、まづ言つたら日本のステ、コなどいふ部類に屬するもので、即ち普通ならば醜い輕蔑の情を催すやうな手振り、體付きなどで、却つて人の注意力を刺戟して、其所に興味を覺えさせるやうなものである。

近代文藝之研究 終



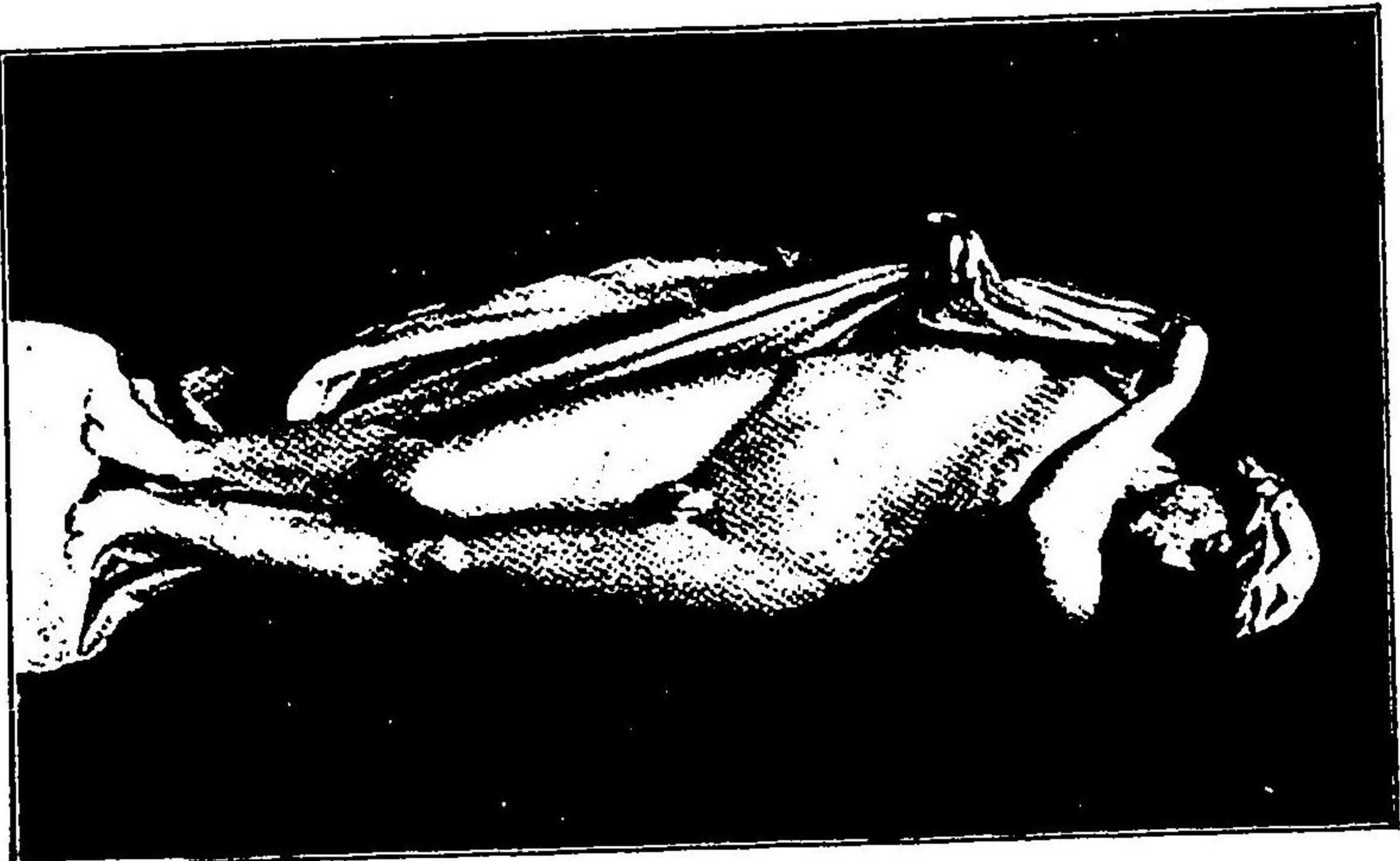
『ローザンタの創作』ナナウ



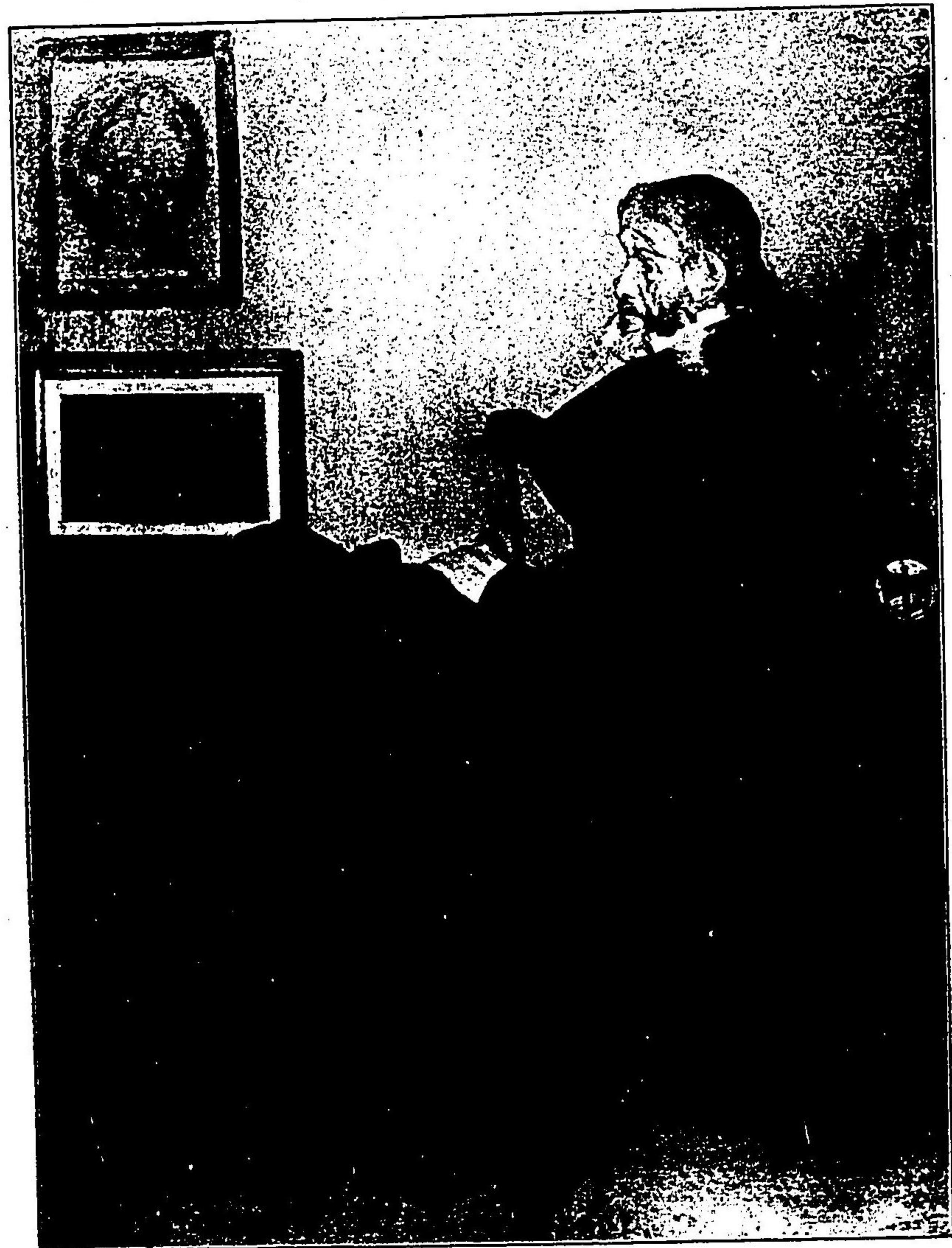
『ローマキーン』作セルブナト



ロダン作『吻』



ロダン作『スラヴ』



『ルイラーカ』筆 - ラスツ井ホ



『人夫スベクマのーリテ、ンレエ』トセーサ

明治四十二年六月二日印刷
明治四十二年六月五日發行

(正價金壹圓八拾錢)

著者 島村瀧太郎

發行者 荒川信賢

印刷者 渡邊八太郎

印刷所 日清印刷株式會社



發行所

東京牛込區
早稻田

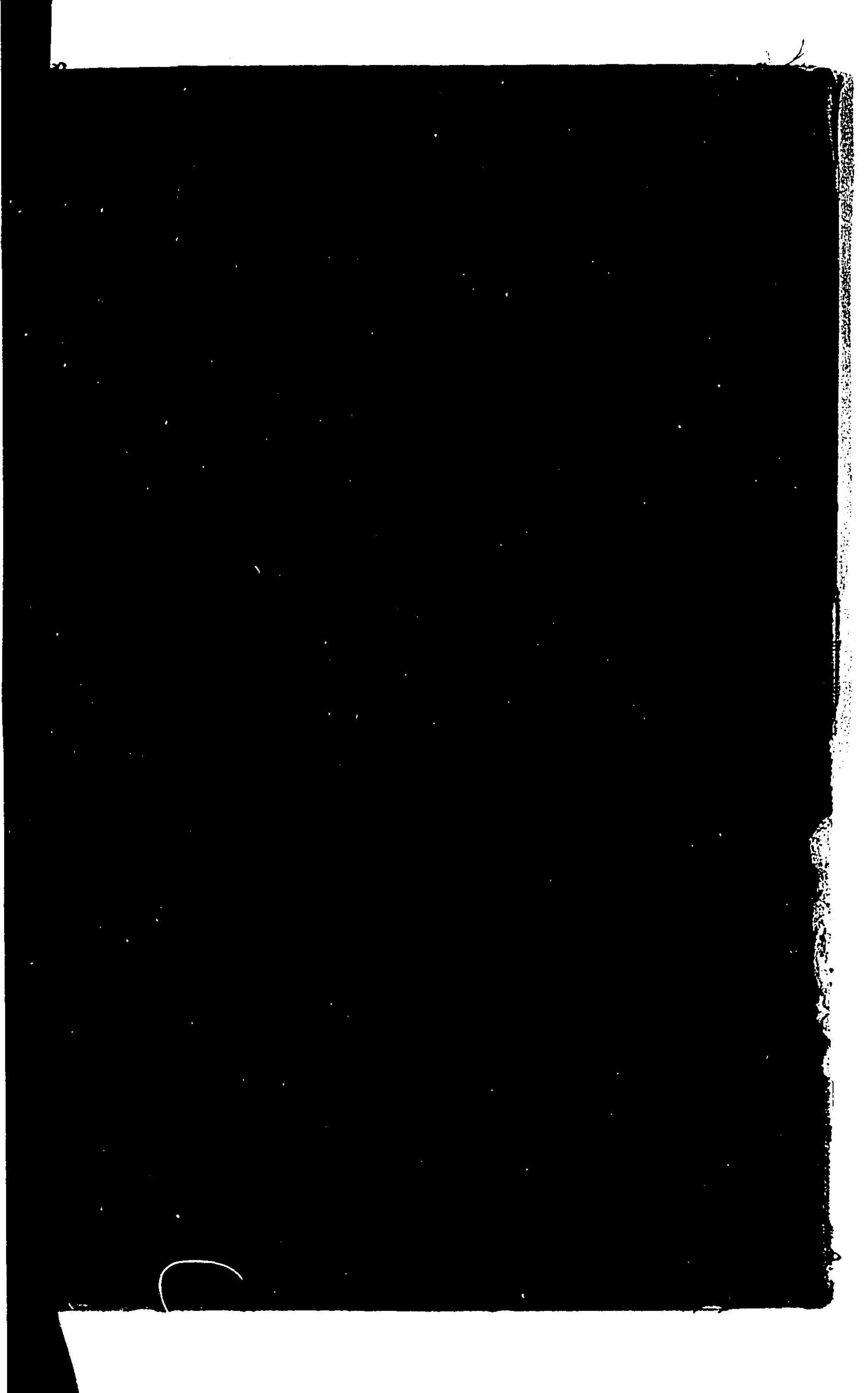
早稻田大學出版部

發 賣 所
博 文 館

東 京 市 日 本 橋 區 本 町 三 丁目

全 國 各 地 書 林
其 他

64
184



64

184

Ⓜ

084706-000-1

64-184

近代文芸之研究

島村 抱月/著

M42

DBA-0030



